

証の雅集

麻生路郎☆主宰

二月号

No.453

ミセザの花
nojiro

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

3月本社句会予告

進 男 国 旗
兼題
紛 装 学
れ

本社二月句会

暖かい会場で楽しく作句をいたしましょう。
最近は特に新人の方がふえました。

日時 二月八日(月) 午後一時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停スグ北側

兼題「呼び捨て」(二句) 麻生路郎選

「抱く」(三句) 西尾 榮選

「片隅」(三句) 後藤梅志選

「橋下」(三句) 正本水客選

席題 三題(当日発表)

清水白柳

呈賞 各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 摩太郎・いさむ・南宗・文秋・唐佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すすむ・薫風・

柳宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円同封

(〆切二月七日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪側六〇八一



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入) 一、ハリットル詰・一、二〇〇円

清酒

日本盛

ニホンサカリ

灘西宮酒造 醸



不朽洞句帖

麻 生 路 郎

記者会見ユーモラスにはまだやれず

あの人の孝行見栄であつたのか

不良だが音楽的な才はあり

断と忘 夢幻の絲で繋ながんか

下駄と離れようとしているのかジャップ

自分を埋めてくれる土の匂いを嗅がん

奥さんよ美を売り尽くしたら何を売る

傍系会社の椅子は冷たきものと知り

定年後遇えば酒までやめている

彼の血のしたたる思い遺著を手に



川柳雑誌★二月号目次

[illegible]



川柳

名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔一四一〕

銀行も造花で経費切りつめる

(静馬)

近ごろの不景気は段々深刻になっていくようである。そこでどここの会社商店でも経費を切り詰めるのに必至のようだ。

一寸銀行を覗いて見ても、今までは花屋

に請負わせて、生花の鉢植を店頭や各室などに配置して、顧客や社員の眼をよろこばせていたが、近ごろでは造花を配置している銀行が多い。本物をとどころに混ぜて、ゴマかしているのは、まだいい方だと云えるだろう。造花は汚れても洗濯が利くのでねとはチャチな話だ。しかし、造花技術の進歩も大したもので、素人眼にはどちらが本物だか、真贋のつかぬものもある。今

に何んでもかでもにせものでマに合う時代が来るかも知れない。

〔一四二〕

社長の友人に家来扱いされ

(方大)

社長はともかくとして、社長の友人までが、立ちほだかったままで「オイ、君」と呼ぶ。

知らんふりをしていると、

「聞えないのかね」と云う。

「何んですか」

「何んですかじやないよ。そこにあるボクのクラブバッグを、社長の車に積み込んで呉れ、すぐ出かけるんだからいそがなくてはダメだよ」

ボクはムッとせざるを得なかった。彼は社長の友人かは知らんが、私たち社員を社長の家来でもあるかのように家来扱いすることはもっての外だというのである。

こんな一句を取りあげても時代は刻一刻と動いていることが知られるのである。

〔一四三〕

I・L・O又その意味を忘れたる

(光郎)

な句だとも云えるし、誰れも気のつかない軽い穿ちの句だとも云えて面白いと思ふ。

新聞やラジオで、さかんにI・L・O、

I・L・Oというのが飛び出して、私の眼や耳を煩わした。はじめは何んのことかハッキリした意味がつかめなかったが、知らんというのもシヤクなので、年鑑や新聞語辞典などを覗いて、Iはインターナショナル、Lはレーバー、Oはオーガニゼーション、日本語に訳すと、国際労働機構の意味になり、I・L・Oはその省略語なのである。内容は国連専門機関の一つで、社会正義の向上と労働条件の改善を目的とした国際間の組織で、各国の労働立法や適正な労働時間、賃金、労働者の保健、衛生に関する勧告、その他の指導を行なっているんだそう。なるほど、そんなものかとアウトラインだけは判ったつもりでいたが、いつのほどにI・L・Oだけでは意味が漠然となり、とうとう意味を忘れてしまったというのである。I・L・Oで判る人たちに

〔一四四〕

明日はれるうそをぬけぬけ予報官

(不二)

科学が進んで来るに従って、段々天気予報も正確に近いものになって来たが、まだまだ予報官を出し抜く、気まぐれ天候のあることは残念でしたと云わざるを得ない。

この句の面白さは、「明日はれるうそを」と云い、「ぬけぬけ」という言葉が思わず破顔一笑させるのである。罪のない句だが、予報官には痛い句であろう。

予報をもっともつと、正確にするためには、科学的な設備や高級な機械を充実させる必要があるが、それにはお定まりの予算がないのでねという逃げ言葉しか持ち合わさないのはお気の毒である。

〔一四五〕

折角のグラビヤ美人に子が誕

(求女)

別にフアンだという訳でもないが、グラビヤページに印刷された魅力のある美人が掲載されてあるので、壁にビンでもとめてと思い切り抜いておいた。それへ逼り来て子がタラタラと涎を流して汚してしまつたという、家庭生活の一トコマのスケッチだが、ごくありふれたことを巧みにと

らえている。グラビヤ美人に心をひかれる若いババらしさが出ていて面白い。

「一四六」

同年兵会で支那語を思い出し

(涼人)

会好きの日本人は、三人寄れば会をつくる。この句は日支事変に生き残った連中の同年兵の会を詠んだものとして面白い。復員して相当の歳月が流れてはいるし、それぞれ異なった職域で働いているので、戦地でウロ覚えの支那語も、すっかり記憶の彼方にあつたが、たまたま同年兵会に出てピ

ーカンカンなどを思い出して、当時をなつかしんだのである。

「一四七」

御夫妻の摩擦もあってもてなされ

「一四七」

(谷水)

お台どこでの夫妻のヒソヒソ話――。

「オイ、コレを」と夫は盃を口のハタへ持つて行く真似をする。

「そんなに、しなくてもよいのじゃないの」と、妻の顔はおだやかでない。

「たまに来たんだ。男には男のつきあひがあるんだ」

「自分が飲みたいからでしょう。昨夜も遅くまで飲んで来たくせに、まるでうわばみね。」

「それと、これとは別さ。簡単にでも頼む

よ。」

とうとう、妻が折れて、その準備に出て行った。斯うした情景が、この句からくみとれる。

「一四八」

信仰の自由を母に叱られる

(甲吉)

「うちは昔からお西さんだよ」と母は云う。

「お仏壇を焼けの、何んのと、もつての外です」と母は重ねていう。母の眼には涙さえ浮かんでいる。

この母に対して、信仰は自由ですと、憲法を持ち出したところが、反響のあろう道理がない。あなたが信仰は自由だと云うのなら、母が死んでからのことにして下さいと叱られたと云うのである。今の世の母子の思想の隔たりがこの一句に凝結しているように思う。

「一四九」

そのとき笑わず通訳へ笑い

(文庫)

言葉というものは相手方に通じてこそ、意義があるものだが、話しても通じない時には、まことにマの抜けたものだ。

明治時代の横浜や神戸の傳夫は外国語は話せなかったが、俥に乗った外人が

How much? と云えば、ハーン俥代を

聞いているんだと判ってから、立派に商売をしたと聞いている。彼等傳夫は外人がハマチというさかなの名を云ったら、俥代を聞いているのだと耳学問で話を通じたのであった。なまじつ、ハッ・マッチと文字ばかりで習った人たちは大学を出ても、外人とは話せないで通訳のご厄介になっているわけだ。この句の「通訳へ笑い」はそうしたマの抜けたとこの面白さを詠んだもの。

「一五〇」

貰うより勲章辞退して光り

(宗太郎)

勲章を欲しがめる心理はこどもを笑えないものがある。イヤこどもよりもっと欲しがり方があくどいものだ。十萬円寄附すれば、何んとか章をやると云えば、十萬円は惜しいが、勲章にはかえられぬという人もいる。

ところが、稀には勲章な

んか要らないという人もいる。同じ要らないという人にも、今更勲章でもなからうじやないかという人もある。全然勲章に興味がなく、ワシは勲章を貰おうと思うて、この仕事をやった

のではない。ワシのやった仕事は社会を利したとすれば、それだけで充分酬いら

れていると云って、勲章を辞退する人もある。ここに詠まれた句は、こうした辞退が貰うよりも、より以上に光っている云うのである。そうかも知れない。

「一五一」

拝観料とれとはほとけのたまわず

(柳志)

京都では寺院などが拝観料と税金問題などで、一トもんちゃくをやっていたが、この句のように、ほとけさまは拝観料をとんなさいとは云っていられないことだけは確かだが、人間どもの世では、ほとけさまよりも拝観料の方にかく重点を置きたがるのである。下五の「のたまわず」で句が生きて来る。

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

大阪一名古屋 ノンストップ

2時間13分

大阪上本町発……毎時0分

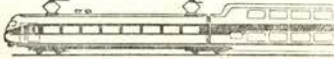
名古屋発……毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき

大阪上本町発……毎時15分

▶伊勢・大阪ゆき

名古屋発……毎時45分



特急券のお求め方は
21日前から近畿日本
本ツーリストと日本
交通公社の各案内所

近鉄



川柳塔

麻生路郎選

豊中市 戸田古方

夏もおべべ着てはりますとこわがられ

需要供給特急券にならばされ

西宮市 若本多久志

十二月差押えに來た夢で覚め

不景気の余波セパートもくれてやり

鍵一つずつ持って冷たい飯を食べ

へそくりは着物にしてから知らされる

残業の帰宅はベルを強く押し

おいおっさんと俺のことらしい

アイウエオ順だけ俺がトップなり

大阪市 正本水客

留守番の子が勉強してる声

爪切っていて嫉妬無視する

北陸にて

ずわい蟹雪には早い雲の下

兵庫県 小西無鬼

記念写真ワンザンなのが巾をとり

マンマンデーの政治に汚職の蚊が湧いて

巳元旦

目標をチット見詰めん巳の如く

堺市 八木摩天郎

顕彰標柱石建立

住居跡不肖の孫と言われそう

増家寺家の盛衰まで見抜き

堺とは別な堺の臨海地

大阪市 北川春巢

予防注射もあるにチリケの灸をすえ

時差出勤いうて遅刻の日をつづけ

お上手を言わぬ屑屋が気に入られ

一本を二回に喫うた十二月

キャッシユか月賦か金利計算には弱く

大阪市 後藤梅志

聖歌隊長屋の人を驚ろかす

十万円自分の金がほしい主婦

羊が遊んでるバルチザンの墓

お世辞まで撒いてテレビの取材班

ハワイ 羽佐間柳葉

同情に縋り自立の気が弛み

大物にだけ人権は擁護され

防府市 長野井蛙

下を見てくらせと頭上げさせず

足まめに雑魚雑魚なりに票集め

請合えば手を抜き備えば手を休め

商売と遊びと女将けじめつけ

岡山県 直原七面山

ご熱心に六法読んでいて詐欺師

嘘を言うのがこんなに下手な僕の妻

刑務所のここまで来てもボスがおり

政変にかかわりもなく河流る

神様のようなお人といて苦し

家を出て下宿したがる嫁き後れ

婦唱夫随百姓やめて都会に出

鳥取市 河村日満



意地すてあつさり買うた加美のもと

手伝うた日を子心に浮かれとり

既得権飲んで帰った上に飲み

稲こきの疲れ会社で養生す

倉敷市 木村 千容

あしこしがたつてわがままでできる幸

おいらくのさきやきつかれいさかえる

本能は老いず生きとしいけるもの

童顔の翁が立てば寿老めき

人間工学はては大脳オートメ化

舌ざわりよい先生に能がなし

倉敷市 田垣 方大

突きはなす愛情もあり男親

部長ともなれば仲人頼まれる

金も名もふっと忘れる梅一りん

やらないかんやらないかんともう二月

加賀市 野村 味平

日曜大工借家の窓もつづくられ

米の値がどうのこうのと犬も飼い

大阪市 木村 水洞

賛成と反対だけの議会なり

金策にこきつかわれる自家用車

女房に師走委せてパチンコ屋

細う長う勤めて無事な歳の暮

米子市 小西 雄々

百グラム買うかずのこへ見栄をもち

栄進へ気になる白痴の子が一人

夜を稼ぐ妻を甲斐性なしが妬き

大阪市 山川 阿茶

値上りを苦にせぬ人には家に風呂

木守柿しなびてゆくを淋しく見

顔よりも服うつしたいカラー写真

五百円のことできつさと寝返る世

加賀市 那谷 光郎

休診日つっぱり切れぬわれ街医

嘘言うて返済願う破目の貸

骨董へ手を出し始めチト貯り

けんかすなコケン狭から又貰い

大阪市 福井 野迷路

世は移る世間話も億単位

もう来たかキリストのないクリスマス

政権交代

がん首を替えて一服菊かおる

岡山県 浜田 久米雄

師を思うこゝろが炭をついでおり

旧友と肩たゝき合いたゝき合い

読み返す便り一服つけて読み

出雲市 尼 緑之助

さりながら元旦の計小さくなり

男の子長じ黙々とした雑煮

又事故かしぐれを衝いて救急車

京都市 大鶴 喜由

秋の蚊よ飛べもせぬ子を何故に生む

やれヨットやれ登山だと母やせる

俗から抜けて振り向けば俗ついて来ず

尼崎市 小林 文月

ある時は姉の如くに老妻の

孫の眼にとまるとまると程に妻は老け

健全な妻五目の相手ためらわず

わが欲しい物ほど大きく値上りし



呉市 林野 魁光

京都市 松川・杜 的

宿命おそろし親の道子が歩き

コップ酒家を探してくれと言う

多額納税者といばれた昔もあったのに

倉敷市 野田素身郎

通勤の日日何事もなく淋し

ジングルベルが師走の足にからみつき

親馬鹿の標本見たり七五三

マッチ箱の会社へ専務とか常務とか

駅前をバチンコ屋の偉容が圧す

二次会になって派閥がはつきりと

代々の天職子等に見放され

鳥取市 森本法泉子

保険屋でなけりやと思う美人が来

岡山市 服部 十九平

妻の看護して

イミテーションでいいわと妻のいじらしい

刃物研ぐ前に砥石が先ず研がれ

男手の洗濯無駄な泡を立て

芦屋市 丸川 初甫

錠剤をつばきで飲んで満員車

転院

聖火台へ日本一の顔になり

墓地を買う話へ妻が乗って来ず

退院のあとをにごさぬ気の疲れ

長襦袢つぶして子供の七五三

高槻市 山田 季賛

佐藤首相初答弁

飯盛山

背の丸い母に僕の年聞かれ

胸張ってみても古兵には勝てず

松風の音へ石段ふみしめる

兄がやるから弟もやる勉強

堺市 高崎 雄声

鶴城

岡山県 田村 藤波

感激も飽きるも早しお人好し

今に建つ城の高さのロープ見る

老いてなお勤勞奉仕が先に立ち

フルシチョフ解任

東京見物

回診の先生愚痴を聞きながし

世界で一番エライのが誠になり

数寄屋橋ここにありきの前で撮り

土ひねる腕が重要文化財

一軒違いでいいとこへ生れたに

米子市 石坂 新雪

都会嫌い母は吐き出すように言う

足の節約考える輪となり

銭別を当分バチンコ資本にし

児島市 本田 恵二朗

島根県 藤井 明朗

煙ったいいろりを囲む米どころ

ふりかざす道理必ずしも勝てず

売出へ人出かきわけ妻達者

砂あびてチャボもころがる暖かさ

鳩時計待つ身を嘔うように鳴く

忘年会酔うてる愚痴は隅に寄り

岡山県 池田 古心



ひとまわりエト間違えられる酷使の身

葉だけ頼りで還暦迎えたり

大阪府 早川 清生

定年で家建て平和いつまでぞ

本国に学ぶ子がいる宣教師

土葬する鯨に別離のこころ生き

大阪市 橋 高 薫 風

元旦は定石をうつ人ばかり

わが影の障子の影も香林忌

神戸市 仲 どん たく

辞書ひけば余生と言う字眼にとまり

紀州行

海賊の歌か田辺はかき曇り

シャターを又アベックにたのまれる

洞穴の湯黒潮を聴きながら

平田市 久 家代 仕男

釣り天狗釣れぬ日行った沙汰もせず

負けぬ気の五十路の肩にサロンパス

田舎町こゝでも工場誘致論

ポーナスの話題農夫は苦り切り

大阪市 本 多 柳 志

現行犯バン一片を盗み

百円のキャベツが軽い市場籠

又上るうわさで背中流し合い

日の丸の良さを代々木で見直され

西宮市 野 呂 鵜 汀

BGの姿で昼に合う芸者

恋をして芸者は易の灯へ座り

子を二人育てて芸のない芸者

ゴルフやりながら手形の思案をし

新潟県 高 野 不 二

世話かけたのから先生へつぎに来る

クラス会校歌歌って終わりにし

社長つかまえて教え子呼ばわりし

百姓にポーナスも使い込みもなし

大阪市 石 倉 旅「風

夢にさえ慾無きすぎて呆れさせ

猫乗せて心ゆたかに紙屑屋

角立ててサアまいろうか蝸牛

大阪市 魚 住 満 潮

続・西成界わい

歩く子と這ふ子失業保険切れ

追いかけて来て別れ話がまだ連れ

盲目と盲目どっちも貯めており

聴け万国の労働者!!何処で飲んだかい機嫌

熱いうちに喰べると内職片付ける

愛媛県 村 上 旭 童

うこねば寒し田ん圃に冬来る

百姓がいやで出たのえまだ送り

農具屋の目にあほらしい故障也

百姓もついに機械に使われる

手ごたえは子供の頃の風の糸

温室の中へ雑草根をおろし

白バイのいと楽しげにはしりぬけ

すねかじりばかりをのせたバスつづく

高槻市 傍 島 静 馬

値を聞いて目刺焼けとも言えぬなり

狂い咲きしたので桜記事になり

パパいつも一人で飲んだとは言わず

ホームバー近ごろほこりだらけなり



お悔み言い言い葬儀屋高いのをすすめ

大阪市 河井 庸祐

旗ふった割にポーナスあがらない
座り込み雀の涙ほどあがり

団交のここは腹芸いるところ

仕事しに來たのはひとりもいぬ初出

グループがつぎつぎ嫁ってあわて出し

大阪府 谷 沢 好祐

男三十五初婚とは疑われ

鉛筆をナイフで削れば亡き母を

撃砲にもプロ用とアマ用と

とり込みへ近所の座布団皿が寄り

ビル街の裏にいたいた紙芝居

木枯しもなんのと続ける立話

青森市 工 藤 甲吉

あられ非常失意の人の頬叩く

人も海も空もみちのく鉛色

ひとり佇てばただ索莫と北の海

父ちゃんは出稼ぎ雪は降りつもる

まなこだけ出して吹雪の街へ出る

北の街陽を見ぬままに暮れかかり

大阪市 今 西 章雅

君もどこか悪いのか病院で奇遇

柿の皮長々むくによき夜長

脱ぐだけで良いとヌードへ誘いの手

京都市 室井 八九寸

梵鐘の余韻腕力だけでなく

ベタベタと十八未滿お断わり

応援もモウ疲れてる零対零

岡山県 横山 一声

十三になった娘の口に負け

共産党どこが悪いと子に聞かれ

小松市 開戸 宗太郎

なんぼ向き変えてもつけもの石だった

おいらくの恋は金沢弁でよし

偶然の一致特売場であい

惜しまれて去るふんざりがまだつかず

石川県 高山 涼髪

養子は養子でも佐藤栄作氏

散るだけの木の葉みな散りスト近し

女ってその気になれば楽に食べ

教会の屋根の尖りがふとわびし

しゃもじのまま味見するとこ子に見られ

美濃市 安平 次弘道

戦後ではない繁栄ケロイドがうづく

急患をたらい廻しにする休診

山につかれた男を包む雪か谷川岳

生きていた英霊叙歎でも間違われ

自殺の手段を考えさす金詰まり

金詰まり黒い噂を呼ぶ株価

不渡りと言う紙切れに倒される
ポーナスを両手で受けるに軽すぎる

立板に水妻は税吏にくい下り

宇部市 平田 実男

縁談へ男好きする顔が邪魔

男みな魔物に見える不仕合わせ

やりくりに出るとは見えぬイヤリング

成人となった自覚で社説を見

諫早市 川岡 靈眼子

屑にした原稿用紙も智のかけら

朝霜をふんで純情の音に触れ

富田林市 浅川 八郎

赤いマフラに女下駄男でした

外人でも茶席では着物それなのに

行き詰まりやお医者さんでも鉢巻きを

さり気なく自分を殺して老の身の

岸和田市 内藤 きさ子

遮断機はおそく秋の陽は早し

犬の足跡残しセメンはかたまりぬ

手鏡の中も師走の顔となり

福引きのビリヘやっぱり腹が立ち

スキーには関心もなし猫と寝る

青森県 木村 涼人

復員の様に出稼荷を背負い

民主々義内股の娘が見当たらず

パパと呼びママと呼ばせて尻に敷き

事故現場いよいよ凄いの月

日本がますますせまい光号



倉吉市 奥谷 弘朗

取り易い所から税金を取る仕組

しとやかさ家の娘に見当たらず

幸福の絶頂と云う喋りよう

人生を和して同ぜぬ四十過ぎ

兵庫県 遠山 可住

飯つぶを背広につけて子ほんのう

末っ子のピストルみんな死んでやり

ブツブツと金の力に負けて去に

ブルドーザーもぐら一しよにすくいあげ

兵庫県 河原みのる

辛うじて九十の親について生き

何くそという農機具がひとつ増え

ニューモードどれが猫やら杓子やら

カレンダーの煤けた美人と袂別ける

鳥取県 清水 一保

福井県にて

標準語に直して聞かせる国自慢

山中温泉にて

此処だけは師走を知らぬ湯がこぼれ

出雲市 中川 晃男

罰金を納めて礼を云うて去に

ペテランの女事務とはなるまじき

古文書の破れ目つなぐセロテープ

銭別に店の借金引いてくれ

松江市 柳 楽鶴丸

ズバリ云うそれがあなたのよいところ

生活の自信女房は強くなり

創価学会押売のように来る

京都市 都倉 求女

忘れものみたいに欠けてる朝の月

間違っていたとは言わず善処する

他人の子が甘えてるのは眼に余り

兵庫県 大江 秋月

寄せ書きの隅っこ僕の小さい文字

警官もデートへ気兼ねして通り

新築をして人生の曲がり角

検札が富士の勇姿へ起こしに来

竹原市 山内 静水

頼みには行かんが頼れる友のいて

看護婦の目にも掃除婦さきいすぎ

ご近所の総出カナリヤ取りおさえ

参考までと自慢にならぬ過去

大阪市 賀本 昇

叱られた恩師へ欠かさぬ年賀状

金メタルの栄光胸に魔女嫁ぐ

枚方市 宮川 珠笑

ライバルの弔辞の嘘へ笑む写真

襟化粧男にいとむ色を見せ

今日の媚洗流した湯が溢れ

引き締めへ石碑建立待たされる

詠 近 舟 同



東京都 富士野 鞍馬

日本語の今日様はいい言葉

和歌山市 秋月 宏方

一足の下駄にも好みいう女

尼さんで終わるに惜しい目鼻立ち

社長叱咤した過去守衛思い出し

自家用車パパはまだまだ乗れぬ地位

須坂市 高峰 柳児

日曜のどかさすり餌も忘れてい

普請場の焚火になごむ話しすぎ

ローカルの車掌の訛り懐かしみ

すぐ消える紙幣をせめても折目つけ

料亭のざわめき無職のふところ手

子に嘘を言うて薄給宵を寝る

信州路へ

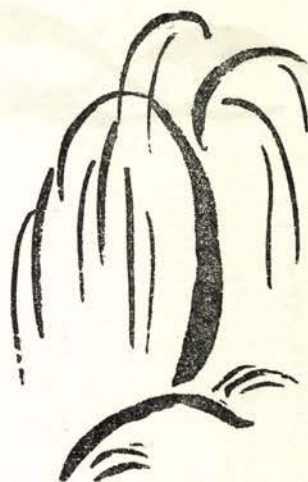
関電の宝庫黒四雪となる

土性骨ばかり強うて職が無し

煉炭へかざす馬鹿正直の掌

スモッグに入社の希望ほけてくる

枸杞アロエ茂ったまゝに死んでゆき



川柳初篇研究 (二三)

丸 十 府 高須啞三味
岡 田 甫 前田喜代人
○ 岡崎重義
川 端 柳 風 藤井和雄
清 博 美

(16ウ)

271 夜桜を見捨て土手で団子也

一 甫

岡崎「夜桜」は、吉原仲之町の桜で、春になると桜樹を植え、竹垣をめぐらし、ぼんばりに灯を入れて、遊客を誘ったものだが、これを見捨て、土手の茶屋で団子をきめこむとは、どういうことか？ 大辞典は「花より団子党」と註解しているが、寂然としない。

清「考えられるのは、入塾、老人、金のない者等。

藤井「やはり「花より団子」党であろう。

高須「「花より団子」でわかると思うが、考えすぎず、吉原の花見に来たが、花は手折らず、きれいに土手まで引き上げて、そこで団子食って、帰った——それではないのか。

前田「「花より団子」の諸説に賛。」見

捨て」が強くひびくから、少しひっかかるが。

丸「高須説に賛。「花より団子」の俚諺を踏まえた表現たることもろん。

岡田「同。前田氏は「見捨て」が強くひびくと云われたが、遊びたいは山々なれど、残念ながら……の気持が含まれているからである。

272 かまくらに居るで万年艸ハうき

鼠 弓

岡崎「家出入の行方が判らないときは、陰干しにした高野の万年草を水に投げ入れると、当人が生きておれば浮き、死んでおれば沈むという。この家出した嫁は、鎌倉松が岡にかけ込んで、離婚のできる三カ年を待っているのだから、当然万年草は浮いたわけである。万年草で占ったのは、実家の母親だろう。

藤井「賛。万年草を知らなかったのので「浮き」を「憂き」と考えて、難解句と悩

んだりした。

高須「この句、松が岡句に間違いない。前述田中彦十郎氏の「ずいひつ縁切寺」135頁(三三八)に出ており、詳しい万年草の解も書いてある。大体確解通りである。

前田「万年草はメノマンネングサ、ゴマノツメとも言い、ペンケイソウ科。各地の山麓、路傍に生ずる宿根草。高さ九—十五cm、葉は散生、扁平円柱形。花は花梗を具え黄色、頂生、円錐状花序に排列する。花期は初夏。九州地方には特に多いようである。

丸「確稿賛。万年草について古今要覧に「本朝俗諺志云、万年草ハ紀州高野山の御廟の垣の内にあり、かたち松の葉のこまかなるやうにて、昔の類なり、一とせに日ありて一度これをとる。此の枯れたる草を水にうかめて他国の人を安否をみるに、存命なるハ水中に活きてはえたるが如し、亡人は

かれたる葉のまゝ也云々」

岡田「諸説に尽く。

273 つゝ突あつめたで子に式本さゝせ

魚 交

岡崎「不詳。

藤井「金を「つっつき集めて」苦心の末、子供を士分にさせた。——つまり、金で御家人の株でも買って、武士にさせた町人の喜びだろう。士農工商の身分が厳然としていた時代だから。

川端「よくわからないが高利貸でもして、他人から悪どく集めた金の力で、子供を苗字帯刀を許される身分にしてやった、という句ではないか？

高須「藤井説かと思うが「つっつき集め」が、どうもピンと来ない。御家人ぐらいよりはか、町人から二本さしにはなれなかったこの時代、ちよつとやそつとの「つっつき集め」ぐらいでは、士分株は買えなかったはず。」

前田「わからぬ。「つっつきあつめ」「二本さゝせ」どちらも類句あれば見たし。

丸「藤井説の如く解している。更に「つっこんで検校ではないかと思っているが、こうした事実を裏付ける文献にまだ接しないので確定せず。

岡田「川端説に賛。また丸先生の言われるように検校。「つっつき集めた」には、盲人のもつ杖も暗示してある。即ち、いわゆる「座頭金」で、あくどい高利で金をため、ついに盲人の最高位である検校になった男が、今度はいよいよ欲をたくましく

し、金の威光で武士の家に男の子を養子に
やったのである。

検校の娘以上へやる気なり (タル六)
以上なら百つけまじよと検校いひ

(タル二〇)

これは娘の場合で、「以上」はお目見え
以上格式のある幕臣を指す。また

証文を焼いて検校縁を組み (タル一七)
引抜いた判を検校引出 (タル一七)
などの句もある。

274 日をぐっと見定め夜着やふとん解

五 鳥

岡崎 〓 これもわからぬ。赤面。

藤井 〓 晴天を見定めて、汚れた夜着や布
団を解き、布を洗濯するのだらう。昔の主
婦は煮焚き、洗濯、裁縫に毎日追われてい
た自主自営の生活だったから、その日の天
気をよく見定めて、山積した仕事の順序を
考えて、やって行かねばならぬ。(今は亡
き母親を思い出す。)

川端 〓 藤井説に賛。夜着類は、湿気の内
晴れた日に干すという。(妻の言)

高須 〓 夜着・布団の類は、内に綿が入っ
ているので、うっかりはホドケぬ。よく天
候を見定めてから、ホドキにかかる。それ
で「ぐっと見定め」て「解き」となるので
ある。

前田 〓 藤井・高須説に賛。「ぐっと」は
大袈裟だが、面白い。

丸 〓 綿を干すには二、三日の天気が必要
そこで「ぐっと」日を見つめることにな
る。つまり天候を見きわめる必要上「ぐっ
と」で生きた句である。

岡田 〓 賛。

275 甲胃のねばついて来る永ひしけ

鼠 弓

岡崎 〓 「永ひしけ」は、梅雨などの水い
湿気で、自然甲胃も湿気を帯びて来る。変
哲もない句のようである。

清 〓 湿気があるため、汗も出て――。

藤井 〓 両軍対陣、永雨でしばし休戦状態
の景か。床の間に飾られた伝家の甲胃でな
く、身に着けた戦陣の甲胃が、湿気と汗で
「ねばついて来る」感じであらう。

川端 〓 身に着けていれば、平常の天気で
も、汗でねばつく。甲胃の土用干しの句は
多いから、梅雨の表現とみたい。

高須 〓 前出(6オ2)の

88 によいによいと竿の立って来るきついし
けの解の時も例句に出された句で、ヨロイ・
カブトのようなドライの物品さえネバつい
て来る「長しけ」を詠った句である。

丸 〓 五月節句の飾りの甲胃である。

岡田 〓 旧五月は、今の六月ごろで梅雨
期。丸先生の説、正解。

276 よらバきらんず勢に下戸しまり

一 甫

岡崎 〓 いきり立つ酔っ払い侍を、なだめ
兼ねている下戸。「寄らば斬らんず勢い」
は、謹寂などの文句取りだらう。

清 〓 喧嘩上戸であらう。

高須 〓 困っているのが「下戸」だから、
刀を振りまわしているのは「上戸」酔っば
らい」にきまっている。柳雨翁は「ちよっ
と見せやれと拔身を下戸納め」を挙げてい
る。

丸 〓 諸説に賛。「寄らば斬らんず勢」
は、前出(3ツ5)にも

48 寄らバ切らんず勢で薬うり
があった。

岡田 〓 諸説に尽く。

277 鹽からを喰ふとって朝日にのミ

泉 河

岡崎 〓 早手まわしの用心といっても、姪
姫せぬうちから墮胎薬朝日丸を吞むなど
は、およそ無意味もいところ、ばかばか
しく手まわしがよく、かえって無意義なこ
とのたとえにいう「明日食う塩辛に今日か
ら水を飲む」の比喩をもじった句。「朝日
丸」は経水早流し、墮胎に効ありと称した
売薬で、毎月朔日に服用していると、月経
が止まる(姪姫する)ことがないとして売
っていたもの。

清 〓 岡崎氏の説、納得がいかなぬ。「塩か
らを喰うと姪姫しない」という俗信が、も
しあるとすれば、いつも塩からを喰ってい
るのに、更に朔日丸を飲んで、避妊に万全
を期した、と解せるのだが。

藤井 〓 「食ふとって」は「食ふといっ
て」その予防にと解する。この「塩から」
は、淫乱な後家さんの好物の隠語ではなか
ろうか? 万全説は「食ふとって」がビタ
リとしない。塩からに、何かほかの意味が
あれば、別だが。

川端 〓 全く「塩辛」がわからぬ。男性の
隠語とすれば、予め朔日丸をのんだ、とな
るのだが。

高須 〓 「喰ふとって」は「食っていて」
ではないか? そうだとすると、朝日丸は

あまり監分の多い食物とは、合わぬことに
なっていて、それを敢えてしているのを、
笑った句ではあるまいか。

前田 〓 朝日丸を飲むのに気がひけるの
で、塩辛を食うといって、ごまかして飲む
というのではなからうか?

丸 〓 「塩辛を食うとて水をのむ」という
諺のもじり。塩辛は、川端説の如く男性器
の隠語であらう。

岡田 〓 諸君「朝日」を朝日丸にとつて、
それと「塩辛」との関連に、すっかり戸惑
ってしまわれたが、小生は素直に「塩辛を
朝日に食った」と解している。すなわち
「朔日に一カ月の終わりだからと、マア一
杯」というのは、商人などには普通だが、
朝日には一寸飲みにくい。しかし、好物の
塩辛をもらった。朝日といえど、何とも我
慢が出来ぬ。早速一杯というので、朝日か
ら飲む……というだけの句。上戸は何につ
け、コジッては飲むものである。

前田 〓 岡田先生説に叩頭。小生はかつて
塩辛を悉々下戸はなめてみる (筈二)

について「塩辛は、酒のみの愛好物の一
つ。これを、なめるようにしてチビチビや
るのは、また格別である。朝日などは、神
酒をおろして、ことさらに肴は求めずに、
ありあわせからもいいものの塩辛で、ちょっ
と一杯やるのは、よいものである」という
原稿を書いたことがあるのに、この句を見
て思い出せなかったのは、大ミス。「つい
たちに」の「に」に注意すべきであった。

278 ままつ子ハ一日はなをたらしける

梅 枝

岡崎「継つ子は、継母がかまってやらな
いのて——」。

清「継つ子の句は、悲惨である。」

藤井「そのまゝの景で平凡。」

高須「普通なら誰かハナぐらい拭いてや
るのだが、イジイジしている子なので、つ
い誰もかまってやらぬ、平凡ではあるが、
つまらない句ではない。こういうツッぱな
した句は、現代調で、現代では案外受ける
のである。」

前田「素直な句だけに平凡。」

丸「賛。」

岡田「同。」

279 あいさびの上へ鏝をなげかける

一甫

岡崎「「あいさび」は「藍錆」で染色の
称。濃藍にやや赤みを帯びた色をいう。薩
摩から織り出す上布紺の類は、すべてこの
藍錆色だという。藍錆の上布へ鏝をなげか
けるのは虫干しである。」

清「「あいさび」を、刀や槍の錆に掛け
ての句であろう。そこで「鏝をなげかけ
る」とつないだものと思う。」

高須「「あいさび」言海には「藍錆」青
の甚だ濃き藍染め」とある。もちろんサツ
マ上布の上物であろう。「なげかける」
は、ヨロイを着る時用いる言葉であるか
ら、あいさびのヨロイ下を着た上へ、ヨロ
イを着た、ということではあるまいか？

丸「賛。「鏝をなげかける」は、高須説
通り。この虫干しは、相当大身の場合で、
本人は恐らく元龜天正の祖先の昔を、ふと
しのんでいることであろう。」

岡田「高須説の如く「なげかけ」にヨロ
イを着る意ありとすれば、土用干しの時イ
タズラにヨロイを着て見たことになる。」

「なげかけ」の用例を知りたい。

丸「「腹巻取ってなげかけ」(太平記)

「草摺からげにさつくと投げかけ(夜討
曾我) 以上「国語大辞典」より。

(17才)

280 買色に取るとあわれでない柳

一甫

清「向島なる梅柳山木母寺の梅若忌を詠
んだ句であろう。」

伝説に依る梅若丸は、吉田少将の一子
で、人買にさらわれ、貞元元年三月十五
日、十二才にして隅田川原の露と消えた
が、里人がこれを憐れみ、死骸を埋めた上
に一株の柳を植えた、ということになって
いる。

「江戸名所図説」にも「梅若丸」塚とし
て、

木母寺の境内にあり、塚上に小祠あ
り、梅若丸の霊を祠りて山王権現と
す。「割註」「縁起に梅若丸は山王権
現の化現なりと云」後に柳を植えて是
を印の柳と号く。(中略) 例年三月十
五日忌日たる故に、大念仏興行あり、
此日都下の貴賤群参せり。

とあり、また、

しるしにとうへし柳も朽はててあはれ
ばかりはのこる古塚

と良尚親王の和歌もある。

さて、梅若忌は旧暦三月十五日で、花見
の季節でもある。そこで、

柳だの桜だのとて出られやす(タル九)
梅若へ行のほうそでよしにする

(タル一五)

帰りに人買に成角田川 (タル五)
等とあるように、梅若忌にかこつけて、
吉原に渡る遊客も多かった。

主題句は、吉原に遊ぶつもりでいる連中
にしてみれば、悲しい最期をとげた梅若の
忌などは、全然問題にしておらず、心はと
つくに吉原に行っているとの意。遊客の本
音をついた句であろう。

藤井「礎解丁寧なれど、納得できず。

「買色」の意わからず、難解句。

川端「「買色」は字面通り「色を買う」
でわかるが「柳」が疑問。——売物・買物
だと思えば「柳腰」の美人も、それほど
「不びん」には思えぬ、の意か？

高須「「買色に取ると」という表現が、
我々には少し耳遠いが、句意は礎解通りで
あろう。

前田「「買色」は「売春婦」のことで、
主として俳諧に用いる言葉である。「柳」
は梅柳山木母寺の略称。はじめは梅若寺と
いつていたが、のち梅柳山隅田院木母寺と
なった。——句意は、礎解通り「吉原行き
の口実としては、梅若寺はあわれではない」
でよいと思う。「買色」と俳諧的な言
葉を使ったのは、「梅若忌」が俳句の季節
の一つだからであろう。

丸「礎稿に賛。「買色に取る」は、女郎
買いかこつけるの意。「あはれ」は、礎
稿引用の良尚親王の和歌をふまえている。
岡田「諸説に尽く。なを一言付加すれば

「買色」は、前田氏が云われるように俳諧
用語。「柳多留」十六篇の巻頭にのせてあ
る柄井川柳の句の傾向として「すべて恋
句、世話事、ばいしょく、下女などの句に
あたらしき趣向むすべし手柄多し」と、
「ばいしょく」の語が用いられている。

281 よほどの婚礼渡しに貳三はい

鼠弓

清「「渡舟」と「引舟」では、多少大き
さも違うだろうが、既出(6才)にも
95乗り合ひをひそそ嫌ハ評をされ
の句があったように、普通の婚礼では、
婚礼に関係のない他の客も一緒に乗ること
ができた。それが渡舟に二三はいもあると
いうのだから。よほど豪華でにぎやかな婚
礼だったのであろう。その豪華さに驚いた
気持ちや卒直に表現した句。他意はあるま
い。

川端「賛。今ならハイヤが列をなす所。
高須「「渡し舟」は乗合だから、二、三
度になったので「引き舟」なら一度ですむ
ところ。どっちにしても「よほどの婚礼」
とおどろいている句である。」

丸「賛。但し引用の「乗合でひそひ
そ……」は婚礼の句ではない。

岡田「お嫁さんの荷物が多いのである。
「よほどの婚礼」は「よほどの大家、金持
ちの婚礼」の意。

282 恥しさどれが兄やら弟やら

一甫

清「昔は、双生児を産むと「畜生腹」な
どといって、ひどく恥ずかしがったものら
しい。この句も、その恥ずかしさを詠んだ

もの。

245 両方へ抱いて吞ませる恥づかしさ (既出15)

702 安々と三人に成る恥かしさ(後出41)
等の類句があり、蛇足にもう一句あげる
と、

乳が一つ赤子に足らぬ恥づかしさ

(タル一五)

と、三つ児を詠んだ句まである。

高須 Ⅱ 双生児の句であるが、俗に「畜生腹」と言われたのは「二卵性双生児」で、普通の「一卵性双生児」は、恥づかしさはあつたろうが、そうなられたとは思えぬ。

丸 Ⅱ 贊。

岡田 Ⅱ 同。

283 高野六十扱つて葉研堀

泉河

清 Ⅱ 「高野六十那智八十」という俚諺がある。これは、高野山で六十才まで、那智山で八十才まで、僧侶が男色を行なうという俗諺だが、これに対して、

「この諺、高野の何のことより言初たるにか覺束なく候、或説に、高野の紙屋谷と云処より漉出る紙は一帖六十枚なり、今浪華に専ら筆を張る紙なり。又熊野牟婁郡小塚村より漉出せる紙は一帖八十枚なり、依てかくいへりとあり。(思ふに、此諺四十しまだの類にて、男のことにあらざるか) Ⅱ 嬉遊笑覧 Ⅱ

「葉研堀」は両国矢ノ倉一帯で、踊り子の本場であり、中条流の医者あり、四ツ目屋のある所。但し、主題句における「葉研堀」

は、旅の六十六部が置いて行ったのを祭ったという「明主院」の葉研堀不動をいつているのであろう。従つて、主題句の意図を、高野六十といったから、次ぎは六十六といったまでのことと解する。つまりらぬ句。

川端 Ⅱ 「高野六十」は、老僧の男色のことだから、近くに踊り子で有名な葉研堀へ、男色にあきた老僧が、通いはじめた、という句ではなからうか?

高須 Ⅱ 「高野六十、那智八十」の間に、六十六の葉研堀が入る、と新説? を称えただけの句であらう。

前田 Ⅱ 川端説に賛。高須説にもとれるが、六十の次は六十六では、あまり意図が見えすぎるようだから、内容的に面白い方をとる。

岡崎 Ⅱ 六十といったから、次は六十六部が置いて行ったのを祭ったという葉研堀不動にひっかけて、六十六と言ったまでのこと。しかし、それも礎稿の「高野六十那智八十」をふまえているが、この比喩は僧侶の男色相手である稚児について、高野山や那智山には年たけた、いわゆる「若衆」がいたことを、高野紙一帖は六十枚、那智判紙は八十枚であることにもついで、稚児の年齢めかして、いったものとされてゐる。それで、両国の葉研堀は不動様と踊り子の巢窟で知られたところだが、その「葉研堀の踊り子は七十を越しても枕席に出た」古来稀なるおどり子は七十余(五八)(山路関古氏「老と死」)ほどだから、老いのセックスの東西の、または男女の双壁として、高野の老「稚児」と葉研堀の婆

「踊り子」をあげたのだらう。

丸 Ⅱ 岡崎説、精致なれど……。

岡田 Ⅱ この句は、六十六部や明主院には無関係。男色では「高野六十那智八十」というが、それに次いで女色の方で「三十振袖四十島田」の踊り子(芸者)が両国葉研堀に……とヤユシただけの句。

284 琴でハわれる三味線ではえる也

泉河

清 Ⅱ この句はバレ。琴は十三弦で、女の十三才を暗示し、三味線は琴の十三弦と三味線の三弦で十六才を暗示している。また俗諺(にも)「十三ばかり毛十六」というがある。

さて「十六才ではえる」方はわかるのだが「十三才でわれる」方はどう説明したらよいのだろうか?

「われる」については、

めつきりとお尻の開くお十三(末三)

と、尻が開くことになっているが、一方四方赤良の狂歌では

十三ではばかり晴れし空われに月のさはりの雲もかからずと、空われの方になっている。とにかく、「十三と十六ただの年でなし」(末一)であることは間違いない。

藤井 Ⅱ 「われる」は、もちろん破瓜のこと。「お尻が開く」とは、お尻が脂肪で豊満になることで、われるとは言わない。

川端 Ⅱ 岡田甫先生著「末摘花群衆」上巻二九八、九、頁に詳しく書かれている。参照。

高須 Ⅱ 「十三ばかり毛十六を川柳、に直した句。「われる」はその「ぱっくり」のことで「破瓜」のこと、疑問の余地なし。

し。

丸 Ⅱ 諸説賛。蛇足ながら「十三ぱっくり……」の俗諺について、「十三ぱっくり……」のほかに「十三ばかり毛十六」というところもある。また関連した諺に「十三になるまでは七面変る」というものもある。両者を対照して考えると、ぱっくりは容貌についていたもの、それがぱっくりとなって藤井・高須説の如く破瓜になったものと思われる。

岡田 Ⅱ 「十三ぱっくり」ともいうが「十三ばかり」というのが普通。破瓜は十六才であることについては「国文学」誌の「江戸艶笑文学探求」特集号(38・5)所載、拙稿「江戸秘語辞典」に諸説を収載しておいた。だから、女子十三才の「十三ぱっかり」を、単に破瓜というのは適当でないわけだが、ただ十三才ごろから成熟様相の初期が見え出し、骨盤も発達し出し、初潮なども見られる……ぐらいに軽く解しておきたい。

Ⅲ 三傍柳初篇研究 訂正

▼四五一号

13頁二段14行目「廊内に女使い」ハ

「文使い」

14頁二段9行目「ところが、ミソだが」ハ

「ところがミソだが」ハ

▼四五二号

17頁上段16行目「句音に」ハ「句意に」

三段6行目「口をすばめては」ハ

「口をすばめて」ハ

8行目「鉄砲を」ハ「鉄砲を」



川柳太平記 (二)

富士野鞍馬

北条義時

北条義時は時政の子で、時政が出家の後、元久二年(一二〇五)幕府の執権を継いだ。則ち二代目の執権で、姉政子と協力して政務を見ていた。

実朝暗殺について、公暁をそのかしたともいわれ、その後の將軍には、頼朝といささかの血縁のある、幼い藤原頼経を京都から迎え、みずから幕府の実権を握った。

承久三年(一二二二)五月、後鳥羽上皇は、政治の実権を院政に回復するため、兵を集めて義時追討の院旨を出された。

京都の院政派と鎌倉幕府と武力衝突の起こることは、とっくから政子は知っていたので、堂々とこれに応じ、義時の子泰時を大将として、大軍を京都へ向わしめた。その幕府軍は、木曾川の防衛線を

ほとんど戦わずして破り、六月十五日、敗軍を追って京都へ入った。

上皇は、特使を遣わして、今度のことは謀臣のやったことで、自分の意志ではないと釈明されたが、どうにもならなかった。

亀菊振付承久の乱拍子

(一三三十三)

承久の乱はころびの出入なり

(安四叶二)

と川柳に詠まれているが、後鳥羽上皇には、亀菊という白拍子あがりの寵姫があった。その亀菊へ領地として、摂津の長江、倉橋の二荘を賜わったが、荘の地頭は侮って納税しなかったので、上皇は義時に諭して地頭を罷めさせようとしたが、応じなかった。という

ことがあり、それも承久の変の一因だろうというのである。それです、義時は連勒の罪でござりやす

(一四八拾四三〇)

義時勅答二分つつかわされ

(一四四二)

という句もあり、亀菊について

亀菊に諸卿も首をすっこませ

(一四七二八)

亀菊の内に宸筆あまたあり

(一四六)

りんげんはみなかめぎくが口う

(一三二五)

初手狐後手の鳥羽には亀がつき

(傍二〇)

おめかけは四条あたりのてんば

(四二拾五二)

などと、白拍子であったので、相当手きびしく詠まれている。

この承久の変の結末として、後

鳥羽上皇は隠岐に、順徳上皇は佐

渡に、土御門上皇は土佐に流し、

幼帝仲恭天皇は九条殿に軟禁し、

高倉天皇の孫を後堀河天皇として

立てた。そして院政派の首領の公

家たちは斬られ、その所領三千余

カ所を没収した。

隠岐島における後鳥羽上皇の生活は十九年間で、延応元年(一二三九)六十才で崩御になった。百人一首に、

ひとをし人も恨めしあぢきなく
世をおもふ故にもの思ふ身は
という御製がのこっている。それをまた、

人もをしとは亀菊がことと見え

(一四三拾四二九)

上の句は亀菊と義時がこと

(一三三八)

と川柳はうがっているが、その通りであつたであらう。亀菊は隠岐までもお供して行つたのである。

この承久の変の結末について義時は、悪逆無道と評されているが、これによって鎌倉幕府の武家政治の基礎が強められたといえよう。それから三年後の元仁元年

(一二二四)義時は政子より一年

早く六十二才でこの世を去つたのである。

北条泰時

北条泰時は義時の長子である。

承久の変の幕府軍大将として京都に入り、叔父時房とともに六波羅にとどまり、探題となり、従来幕府の権力が西国に弱かつたのを全国的に拡大した。

元仁元年(一二二四)義時が死

んだので、泰時鎌倉に帰って執権となつた、その翌年伯母政子もなくなったので、それからは泰時独自の政治を行なうことになった。

貞永元年(一二三二)には「御成敗式目」を制定し、善政を布いて、執権政治の安定を実現した。執権職にあること十八年、仁治三年(一二四二)六十才で没した。

安い時仕出し高い時つづれ

(四一二八)

安い時もふけて高い時つづれ

(六三三)

と川柳に詠まれているように、三代泰時の時代にはよかつたが、九代の高時が暗愚でついに亡びたのである。泰時制定の「御成敗式目」は「貞永式目」ともいい、江戸時代までも用いられた。

北條時頼

北条時頼は時氏の子、泰時の孫である。寛元四年(一二四六)十九才で執権となり、勤儉質素を励行し、文武を奨励して善政を施した。出家して最明寺殿といわれ、諸国を行脚して政道を視察したことなど、よく後世に伝えられている。

——味噌で酒盛——

吉田兼好の「徒然草」に、「平の宣時朝臣老の後、昔語に

(七八二九)

「最明寺入道、ある宵の間に呼
 るることありしに、「やがて」
 と申しながら、直垂のなくて、
 とかくせしほどに、また使来
 りて「直垂などの候はぬにや、
 夜なればことやうなりとも疾
 く」とありしかば、なえたる直
 垂、うちうちのままにてまかり
 たりしに、鏡子に土器とり添へ
 てもて出でて、「この酒を一人
 たうべむがさうさうしければ申
 しつるなり。看こそなけれ、人
 は静りぬらむ。さりぬべきもの
 やあると、いづくまでも求め給
 へ」とありしかば、紙燭さして
 くまぐまを求めしほどに、台所
 の棚に小土器に味噌の少しつき
 たるを見出でて、「これを、求め
 得て候ふ」と申ししかば「こと
 足りなむ」とて、心よく数献に
 及びて、興に入られ侍りし。そ
 の世にはかくこそ侍りしか」と
 申されき。」

と書かれてある。これは有名な話
 として今に伝わり、川柳もまたそ
 れを詠んでいる。

味噌をなめなめ時頼も数献也

(三九一三)

焼飯の御代生味噌で酒を飲み

(九二三七九二九)

味噌で吞ころは崩れぬ握り飯

(一四二二五)

すらせるは高野なめたは最明寺

(一二三二七)

土器の味噌は国家を塩梅し

四方へ行届くは味噌の御教訓

(一〇八一六)

みそで始まり田楽では乱れ

(一〇四四〇)

焼飯というのは、その三角な形
 を北条の紋三つ鱗になぞらえた趣
 向で、田楽は高時が田楽舞が好き
 であったのを食物にかけた作で
 ある、また四方は江戸和泉町の四
 方の赤味噌をにおわせてある。

—賢母—

時頼の勤儉質素は、賢母、松下
 の禅尼の感化が大いにあったとい
 われ、「徒然草」には禅尼のこと
 を次のように書いてある。

「相模の守時頼の母は、松下の
 禅尼とぞ申しける。守を入れ申
 さるることありけるに、すすけ
 たる明り障子のやぶればかり
 を、禅尼手づから、小刀して切
 り廻しつづ張られければ、兄の
 城の介義景、その日の終營して
 候ひけるが、「賜りて某男に張
 らせ候はむ。さようの事に心得
 たるものに候ふ」と申されけれ
 ば、「その男、尼が細工によも
 まさり侍らじ」とて、なほ一間
 づつ張られけるを、義景、「み
 なを張りかへ候はむは、はるか
 にたやすく候ふべし。まだらに

候ふも見ぐるし、や」と、重ねて

申されければ、「尼も後はさわ

さわと張りかへむと思へども、

今日ばかりは、わざとかくて

あるべきなり。ものはやぶれた

る所ばかりを修理して、用いる

ことぞと、若き人に見ならはせ

て、心づけむ為なり」と申され

ける。いとありがたかりけり。

世を治むる道、儉約をもとと

す。女性なれども聖人の心に通

へり。天下を保つほどの人の子

にてもたれるかまことにただ

人にはあらざりけるとぞ。」

これは、長く世に説き伝えられ

た美談で、川柳もこれを多く作

っている。

切張は風よりしみる御教訓

(五六三十一)

きつとした意見は障子の切り張

(三二一三三)

切り張りに禅尼天下の矩をとき

(四四三三)

切張は大事をしやうじより教え

(四〇〇八)

和らかに解いた禅尼の刷毛序

(一二六三三)

きりはりて国家へ穴をあけさせ

(五七六)

障子の教訓横紙は破られじ

(九一七)

せうじより大事を尼の御教訓

(一二八二六)

大事は障子よりおこる御教訓

(九二二〇)

花も実もある切張りの御教訓

(七二一二)

切張の跡で異見の刷毛序

(八三三二)

風よりもしみる障子の御教訓

(五五四)

機障子賢で切りたり張たりし

(八二三三)

と、禅尼の教訓を踏え、「機は、

孟子の母が、学業の途中で帰って

来た孟子に、織っていた機の布を

断ち切つて、教訓したという故事

をいったのである。

—諸国行脚—

時頼は出家して最明寺と称し、
 政情視察のため、諸国行脚に出か
 けた。上野の国佐野を通った時、
 大雪に遭い夜となり、貧乏武士佐
 野源左衛門常世の家に、一夜の宿
 を乞うた。

さいめうじ老人あるきもした男

(四二五)

時よりは行脚にも出るさい明寺

(七八二二)

難行は諸人を慈悲の最明寺

(九九一七)

時頼の出にも鱗の雪が降り

(一一〇六)

おとなしくたすみ給ふ最明寺

(武一一一)

石地藏最明寺めく雪の佐野

(一四〇一八)

最明寺したい庄屋へかかる所

(拾四)

行暮れて十方にくれる最明寺

(七六四)

雪中難波の時頼は、招じられて
 佐野源左衛門の家に泊したので
 あったが、暖をとるべき薪もない
 貧乏家で、鉢の水を焚いてもてな
 した。

五代目は雪になんぎをめされた

(安二亀二)

さいみようじいんぐわな所へ宿

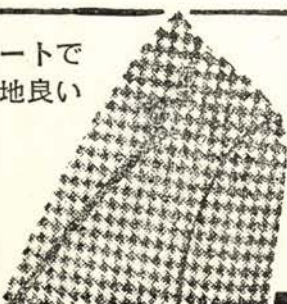
(一八七)

煙たいにはとんど困る最明寺

GOLDEN
 O.S.K.の
 紳士服

各地特約店に有り

スマートで
 着心地良い





蛇のかつおぶし

東野 大八

へビは長すぎる——というルナールの言葉がある。

しかし私は蛇は格別長いと感じたことはない。適当に身に合った

長さで、文字通り横行しているのだと信じている。ルナールが何かの拍子に口に出したこの言葉は、多分に蛇嫌いの点からきているようだ。余の儀の人間ではなく、ルナール先生であつたことが、多分にアカデミックな何かへの比喩ともなつて世に残つたのではアルまいか。

——寝て解けば帯はこんなに長いもの

という句があるが、つまりこんな「長さ」のその場そのときの意味づけだつたに相違ない。

それはとにかく、人間蛇の好きな人はごく一部だ。好き、というより馴れかもしれないが、蛇料理屋、強精剤売り、サーカスの蛇使

いなどは、蛇を媒体にして商売をしている以上、この長ものを嫌つていてはめしのタネにならない。

トンボをむしゃむしゃたべたり、げんごろうに網引きさせたりした私の子供のころは、蛇はやはり童心の怨敵的存在であつたことはたしかだ。青大将がそのイケニエのすべてを引き受けた形だ。此奴は壮大に太くつて手に余るほど長かつたが、そのくせ大変な鈍物でお人好しのところがあつた。しつぽをもつてふり回すと、よせよ、よせよ、とぶつぶついながら眼を回し、挙句の果てに木に逆づりにされたり、石の角であえない最後を遂げたりした。私はこれが衣替えした、練り衣のような脱け殻が好きだつた。眼玉のフチまでそっくり脱ぎかえた腰紐の皮みたいなのを首に巻いて学校へ出か

け、女の先生のオルガンの上に長々と置いてきたりした。

大陸へ出て、ジャーナリストの端くれになつた若いころ、ある料亭の女将から金指輪をとりあげ、それを指にして二次会のバーへ行つたら、そのマダムが一ぺんに気に入、プレゼントしてよ、今晚看板まで奢るワよといった。そんなに値打ちがあるのか、といったら「この指輪は厄よけの神様だ」といった。よくみるとそれは純金の蛇であつた。眼玉が銀でごく小粒の黒ダイヤが入つていた。水商売に已さまが縁があるとはこのときに知れた。そんなに欲しいのならと人のモノだと思つて気前のいいところをみせ、マダムのお言葉に心ゆくまで甘えたのはよかつたが、それを知つた女将が怒つてその翌日バーへ押しかけ、女将对マダムの好取組となつた。ど

(一四九六)

寒いよりけむいにこまる最明寺

(一二三二)

そしていろいろ雑談となり、

最明寺何のかのとてにじり込み

(三三五)

銭もうけあるかないかと最明寺

(拾五)

気をくさらかつしやるなと最明寺

(拾五)

あの馬はのれますまいと最明寺

(一九六)

馬は居たが食べさせてないので

瘦せ衰えていた。食事には粟飯であつた。

騒という晩でござると最明寺

(一二三七)

最明寺其時口がむぐむぐし

(七〇二)

最明寺まだ有かのとかへて喰ひ

(拾五)

ろせいはたきたてひやめしは最

明寺

(二二一五)

昔中国の盧生は粟飯の炊ける間

邯鄲夢の枕であつたから炊きたて

ということになる。

最明寺もつと泊るときらずめし

(一六三)

ということになったかも知れない。

源左衛門は「鎌倉に御大事あれば一番に馳せ参じ申すべし」といつて時頼を送つた。

その後時頼は、源左衛門の言葉

を試してみようと、にわかに関八

州の軍勢を鎌倉に召集した。

最明寺うたがいふかい勢をよせ

(拾五)

ところが、言葉に違はず源左衛

門は、瘦馬に乗つて一番に駆けつ

けた。

それでこそ武士だ武士だと最明

寺

かの馬にのつて来たかときいめ

うじ

その忠誠に感じた時頼は、前の

雪の夜の宿泊の礼として、加賀の

梅田、越中の桜井、上野の松井田

の三個の荘を、新領地として源左

衛門に与えた、というのである。

最明寺大きな木賃泊りする

(二九一九)

世を捨て恩をばすてぬ最明寺

(七六二)

鉢の木を大木にして御返礼

(九二〇)

まことにめでたい美談である。

なおこの話に附会して、

最明寺どこぞで知れる銭遣ひ

(武六三)

雪は降らねどこの暮は最明寺

(九四二〇)

という句もある。

そうして時頼は、弘長三年(一

二六三)三十七才という若さで、惜

しまれつつ世を去つたのである。

「つちも太っちゃで、欲ばりだったから、傍でみていても砂ぼこりが立つほどの大舌敵だった。私はその姿から故郷の草シダの下にいた産卵期青大将の姿を思い出した。」

兵隊ではこんなことがあった。

一つ星の臆病な補充兵が、ドンドンバチバチの最中に一メートル以上もとび上がって走り出した。バカヤロウ、と分隊長にどなりつけられたが、あとで大きくと奴さんの入っているタコッポに青大将が落ちてきたのだという。蛇より怖い鉄砲玉がわんざとび交う中へ走り込んだ此奴はよほどの蛇嫌いだっただろう。

戦傷して陸軍病院で読んだ白蛇伝に美女に惚れられて逃げ回る秀才の話があったが、蛇性の淫や上田秋成の妖奇ものには、蛇の精が現われるが、邪恋とか淫欲には蛇がさかんに引合いに出てくる。しかし私はもの心つくころから青大将が友達だったせいか、そう世間というほど蛇族は悪い奴ではないと思っている。見た眼が最テキかつグロなだけで。交尾するときは横綱の太縄みたいだし、動いているときは長いだけの行進である。

春期発動期の馬や犬みたいに隠しどころをブラブラさせているイヤらしきがない。

マムシとかヤマカガシにしても、猛毒のかわりに人間さまにあらの方のスタミナをつく薬用となつて貢献している。にもかかわらず人間共の眼の仇にされるのだから、時には噛みつきたくもなろう。

「これたべなさい、身体にきくわよ」

とむかしほうれん草にかつお節のかけたのをよばれたが、どうも味が変なので妙な顔をしたら、その奥さんが腹をかかえて笑った。かつお節はマムシの干ものだったのである。その奥さんは大陸からの引揚者で帰国の際、羽根ぶとん二枚を背負って船に乗り込んだというから大したスタミナだった。これというのもマムシのおかげである。

うちの妻は天下の名川、木曽川だが、ここが増水すると必ず水ぎわに蛇がのたついている。先達の夏も、五ひきばかりの蛇が、濁水に洗われる草むらに集まっていたのに出会った。みんな青大将である。いずれもモノ持ちの且

那ぐらいに肥えていて元帥級だ。

「よう大将、儲かるかい」と声がかけたいぐらだった。私はとにかくかがみ込んでその五尾を眺めていると、なかの一本きがこちらをチラリとみた。とたんにぞろぞろ一同は動き出した。濡れたゴム紐みたいな舌をベロベロさかんに出し入れしての行進である。

「イヤなくそちいさんだ」

「さわらずに、さわらずにそつとしとりやあ何もせやあせん」

「とにかく離れるこっちゃ早う行かう行こう」

向こうも言うことは人間とは変わりはない。そこでついニコニコして、附近にいるおばさんをつかまえ

「いますね、五ひきのサムライが向かうを通っていったよ」といったら、このおばさんテレビと感ちがいしていたがやがて本モノと気づくや

「まあイヤらしい」

といい放つなりまじまじと私の顔をみた。その眼はさっきの青太大将よりうんと気味が悪かった。

路郎先生の喜寿・金婚の祝賀について

——お知らせとお願い——

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜寿・金婚祝賀行事については本会が主体となつて昨秋以来慎重な企てをととのえ、全川柳人賛同の下に一大盛典を挙行する運びになつておりましたところ本春に至り路郎師から

で、何卒この機を逃さずご参加お申し込みの程お願い申し上げます。

昭和三十九年六月吉日

川柳不朽洞会

常任理事

北川 春泉
松江 梅里
川村 好郎
西尾 栗

麻生路郎先生の

作品頒布

作品——(一)軸・横額

(二)色紙(三)短冊

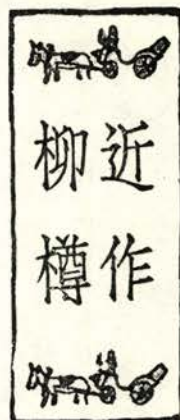
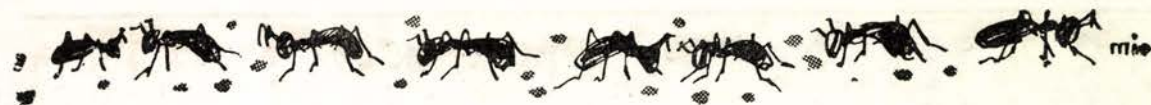
と固辞されましたので、本会ではその前後策につき数回役員会を開催いたしましたして、先生のお身体に障りのない範囲で、同時に先生のお気持ちに添うた我々の祝意をうけて頂く行事として左記企画のご揮毫についてご諒承を頂きました次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齡のことでもあり、願わないことではあります、これが最後のご揮毫となるやを思う時、我等川柳人として愛蔵すべき家宝を得る、得難きチャンスではないかと存じますの

申込所 川柳不朽洞会

電話大阪六七局六〇八一

大阪市住吉区万代
西五丁目二五



麻生路郎選

川村好郎選

馳ける人佇む人と暮れの橋 羽曳野市

井上圭太

大晦日誰か電話を聞いてくれ

同

街を仮死させてサイレン突走る

同

狂犬が威張っていますサングラス

同

もう巴里を踏んでる顔がいる羽田

同

再会へ貧しき襟をかき合わせ

同

せめてもの若さよ妻の立話

同

ひそやかな誕生なれど春の露

同

母の味が無い給食への不満 仙台市

平野光道

高級車にブレーキかけさせ大横断

同

やりよのめどまだつかず仕舞風呂

同

貧無くす政治しないで徳用米

同

もったいない服着てるなと思う顔

同

俺は文句言わんと断ってからくどく

同

楽譜すらすら読めて家計簿も組めず

同

再会へ昔の恋のあぶく見る 大阪市

今井章子

枯れ枝に目がかゝった風呂帰り

同

初恋を裂く常識の無情さよ

同

母と来た旅は互いに流し合い

同

熱弁のあまりに嘘を入れていた

同

足出してまでも機嫌を取る弱み

同

告白の後は時計の音となり

同

ギリギリに来て開会を急ぎ立てる 岡山市

永宗宗義

ゴール前絵にも書けない顔を見せ

同

句読点ないま、過ぎた五十年

同

故郷は良し赤の他人も泣いてくれ

同

枯葉の未練梢にしがみつ

同

はした株持って総会かきまわし

同

救いなき心を月に見すかさね 大阪府

河本雪男

追従を言うた後悔まだ残り

同

裏街の屋台にあった暖かさ

同

パチンコが趣味とは哀れ平社員

同

厚化粧どこまで墮落するつもり

同

体力で乗れと満員電車来る

同

酔眼がまぼろしと見た聖歌隊 羽曳野市

杉本胡人

車の洪水老婆が堰止める

同



酒呑みの癖を愛すべし

麻生茂乃

酒は桜花爛漫たる花の下で汲み
かわすべきものであると思うの
は、普通人の考えであって、酔う
事を楽しむ人達の夢である。

酔うて憂さをはらすのは飲酒の
特典でもあるが、酔うと言う事よ
りも、もっとも魅力である。
のは秋の酒の味覚である。

白玉の歯に泌みとほる秋の夜の
酒はしすかに呑むべかりけり
牧水
なあちろりこれから秋にしたし
もう
こほろぎに誘われてゆく酒の味
路郎
狹豆

此の一首二句の短詩は、いずれ
も秋の酒を讃美したものである。
酒に酔うと言う事と、酒を味わう
と言う事と秤にかけて見た時、ど
つちがピンと上るか、酒をたし
なむ人達の環境によって違うので
ある。

年が年中虚けられた立場にあつ
て、自分の考えさえも発表出来な
い人達は、酒を呑んでいい気持ち
になった時が初めて其の束縛から
ほどかれた時である。だから平素



産室の幅だけ歩く靴の音

同

愛想よく質屋薄情になっており

同

アルバムが最初が僕の素っ裸

同

君が代で始まり万歳まで飲みつけ

吉田 隆史

一〇番呼んで押売突き出され

同

逢うた夜待ってた程にもの言えず

同

勲章もダイヤも縁なしコップ酒

同

雪のないスキー麻雀派手になり

同

一同で一本提げた祝酒

水粉 千翁

停年の出直す明日へ夕焼ける

同

伝統ののれん汚れたままで売れ

同

広告へ嘘もきれいにまとめられ

同

押入れが有って家賃あきらめる

同

ボーナ^ス無い身を師走の風が切り

井谷みつお

外泊許可子等もはずんだ晦日そば

同

自粛するはずの隣へ又歳暮

同

泰然と仁術信じて担送車

同

孝養としゃれた車に母が酔い

同

聞かなんだ事^にが気にかゝり

安藤 桂仙

老い恥をかくよと明治同志なり

同

駆け出^{して}見^{たい}気もする日もありて

同

ズック靴秋の深さを身に感じ

同

御仏にすまぬが肩の荷をおろし

同

大晦日独りのむなしさ拡がる日

末沢 花美

テーゼとか言^{って}味噌汁さえ炊けず

同

襟元へ話さぬ過去が線に出て

同

軽蔑を後に背筋をシャンと立て

同

押売りも泣く子をあやすこ^{とも}知り

松高 秀峰

下心あ^{って}見送る顔並び

同

人間の弱味歳暮もかゝされず

同

ソツのない接待平から叩き上げ

同

腕前が勿体ないという身持ち

岸本 木魚

独学の六法全書ちびれかけ

同

改札を出ればおしやべり又つゞき

同

平社員の私の持論支持もなく

西本 保夫

頭ベコベコ下げて案外強い秘書

同

うかつにも笑えぬ秘書の役につき

同

八方美人頼りにされて気が疲れ

水谷 谷水

馬耳東風あれでもお手伝いさんか

同

何のお前うちだけでなし督促書

同

キツチン^{カイ}野良着の主婦に取りまかれ

星野 侑正

招かざる客どや^くと酔うて来る

同

暖房完備村の小ぢやかな散髪屋

同

臨月が向うから来る圧迫感

中川 滋雀

謹厳な人でも、酒を呑めば、少々くだけた人になる。時には言語道断と思われる暴言さえも吐く。人の心象を害していながら、当人は極めて有頂天である。

ネロ皇帝のようなエゴイズムを満喫しているのである。私はその感じは愛すべきものであつて、決して憎むべきものではないと思ふ。世の中にはあらゆる悪辣な策を講じて、自己の栄達を計ろうとする輩もいる。それに比べれば何と無邪気な存在ではないか。

酒は呑むべし。呑まるべからず。飲酒家の誰しも此の制限は心得ている筈であるのに、思いもかけぬ失態をしてかす事がある。

自分は一升酒である。五合位はほろくそであると思つてゐるのに、其の日のからだのコンディションによつて、一合の酒に前後不



タケダ薬品

疲れ
神経痛
肩こり
心臓病
疲れ目

アリナミン®のもう!





がらりとシャッター下りて倒産す

同

税過納米署ありたし金十円

同

鹿害がどうのと冷たいことを言う

村上 春巳

金が金呼ぶか家を建てよった

同

入墨の鯉の頭へサロンパス

同

温顔をそこらそんじよに遺し逝き

伊藤 歌子

事故死（これ）があきらめられようぞ

同

一人旅今頃何処まで行ったやら

同

若者の恋が進んでゆく自信

杉原 愛鳩

青くさい発言 赤と間違われ

同

ふるさとの霞不孝の頬をうち

同

冬雲の微動に淡き思慕流る

常岡 孝風

ボーナスのない天職の晩たしか

同

煩惱に克とう銃口鴉に向け

同

日本人はなれしてるが美人とか

鈴木村 飄子

一瞬の無念無想を希う身の

同

構想に外れた名文出来上り

同

辞令（も）先に記者来るインタビュ

山田 李鳥

我れと来て遊べや金の無い同志

同

ビニールにすねて胡瓜は曲（が）って居

同

立ち直る身に町の灯がまぶし過ぎ

磯野与之助

独学へ代筆たのむ飯場の夜

同

延々と話す電話に列が出来

同

乾燥機今日もみのりの音を立て

斉藤 たけお

鶏飼えば急に卵の値が下り

同

浮気させまい面会の妻 健な気

古川 静波

愛の断層型が消えないので嫁けず

同

フラッシュを浴びボス猿（の）ほけ顔

岡本 昭三

任してはいても気になる老眼鏡

同

金策がうまくゆかない声 帰り

三宅 ろ亭

やりもの愚痴をうつろに聞く炬燵

同

自我を捨ていこいの家の楽しさよ

鈴木 生弘

押売りの事情を聞いてことわれず

同

若妻のおせち料理はバター 臭く

小林 美代

押売りは事故の話もしてねばり

同

寝静まる商店街の長う見え

宮尾 あいき

今日も又叱られました事始め

同

百姓の勘が当たって雨となり

近藤 秋星

野の草も枯れぬ愛情しほむ時

同

酌ぐまねに乗れば割勘にされ

齊藤 流路

分らない世相をよそに飲むとする

同

保険屋に高飛車に出る術も知り

三井 醉夢

妻はもう結婚記念は口にせず

同

哀調がからめば煙霧歌になり

守屋 万竿

覚になる事がある。この場合その人を自制心のない人であると咎め立てをするのは、いささか酷であると思う。

泣き上戸には泣き上戸になる原因がある。一緒に泣いて泣いてあげるのがカラスミより、コノワタよりもっと、もっと其の人にはよいかかなになるのではないだろうか。

吉屋信子の小説に、「女の友情」というのがあるが、酒呑みには酒呑みの友情というのがある。それは酒呑みの心理を理解する事である。よしんば、量の上へ小便するような失態をしかけても、陶酔の別天地に遊ぶ彼の心状には同情すべきものがあるのである。

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(295) 出口夢詩朗

(一) 出口高次郎 (二) 夢詩朗
(三) 豊景 (四) 北九州市小倉区黄金町三丁目 (五) 明治二十六年七月六日 (六) 北九州市小倉区 (七) 書道教授 (八) — (九) 母のしたとおりついたち十五日



福引場軽い失意が顔に出る 同
 マニキュアも無く毛糸編む妊婦妻 留毛市 渡辺伊津志
 正月はいゝな故郷の餅が来る 同
 受けいだ古いのれんが世に合わず 出雲市 高野 栄子
 水害の被害でテレビに写る里 同
 ほやほやの免許で見舞に来てくれる 出雲市 藤間 由起
 切手貼る場所もなつかし母の文 同
 スケジュール縮めはやばや酒の膳 名古屋市 花東千久良
 見返って理屈は抜きにすると決め 同
 看護婦の浴衣姿に女を見 出雲市 馬路 一舟
 仲人は美人の範囲を広う持ち 同
 散葉を飛ばしてしもう 込みよう 島根県 影山 青三
 忘年会肩書はずして粋な芸 同
 老いて尚芸一筋と言うピエロ 見島市 伊丹柳瓢子
 コップ酒祭太鼓に湧く郷愁 同
 借り貸しは無し元旦も朝寝する 玉野市 小谷 仙山
 回診へ見舞の客もかしこまり 同
 不景気の底とは見えぬ店飾り 八代市 永松 道雄
 おとなしくすればする義理の母 同
 灰皿の務めに皿の生き延びる 京都府 大久保 和三郎

親の瞳にピントが合わぬ子の長所 同
 初上り杜士もきげんで春唄う 神戸市 国友 えつ
 ゴミ溜めあさり犬だけでない世相 河内長野市 森本黒天子
 化粧品買うに老眼鏡で読み 大阪府 福富 隆子
 歩き方迄も花嫁修業中 金沢市 根上 杏花
 再婚を進める下駄を揃えられ 玉島市 井上 旭峯
 食べて寝てしまつて実家いゝところ 島根県 安立 葉菜
 新薬も効かずあんまを呼びにやり 出雲市 米山 三子
 方言で小言言いく伯父はなし 高知県 山川 勝子
 のんびりと仏相手の寺の暮 京都府 西村句楽坊
 論争に時の氏神巻き込まれ 長崎県 大崎 筆染
 氷点下目ざまし一段高く鳴り 八戸市 川村 映輝
 発言も妻強くなる三十過ぎ 今治市 越智 一水
 近頃の若いやつはで有った僕 神戸市 大野木真砂
 ポーナスが懐にある靴の音 松江市 岡崎 祥月
 留守番と知らず別荘うらやまれ 今治市 小笠原青女
 嫁が娘がおせち頼むといってくる 大阪府 木村 久子
 玄関の一輪差しに家風知り 蘇市 和泉 松風
 白衣女に見え深き傷癒ゆ 兵庫縣 磯野 与志
 隣席に坐らせたくない荷物 石川縣 大山 雅城

(一〇) 書道、画(日本画) 田

基、将棋その他室内競技全般(一

二) 死亡なし(二二) 大正三年

(296) 有 働 芳 仙

(二) 有働功(二) 芳仙(三) 青

峰(書道)(四) 熊本県飽託郡河

内芳野村黒石(五) 大正四年四月

一日(六) 熊本県鹿本郡山鹿町

(七) 教員(八) (九)

人生がそらつ始まった呱呱の声

(一〇) 書道、美術(一一) 有

(一二) 昭和二十四年十一月

(297) 深 尾 陽

(一) 深尾陽(二) (三) (四)

大阪市天王寺区清堀町二六

(五) 明治三十七年十月二十六日

(六) 大阪市東区豊後町(七) 印

刷業(八) 大阪七六二一〇四六

〇(九) 考える人のポーズで植

木職(一〇) 小唄・清元(一一)

有(一二) 昭和三十四年八月二十

七日

(298) 久 家 代 仕 男

(一) 久家義雄(二) 代仕男(三)

(四) 島根県平田市灘分町

一、八二二(五) 大正九年三月八

日(六) 現住所に同じ(七) 公務

員(農産物検査官)(八) (九)

無情とや電話の主がもう様

かれ(一〇) スポーツ、花卉園芸

(一一) 昭和三十八年急逝(一二)

昭和二十四年七月頃



江戸川柳と紋章

阿達義雄

〔町人紋〕

次に前に述べた歌舞伎役者を家紋の上から詠んだ句を示してみよう、

○金元トは綿を抜くなら嫌やといふ

(七〇・一六)

一座の金主も、瀬川菊之丞の様な名女形に抜ければ採算がとれないから御免を蒙ると言う。結綿紋は菊之丞の家紋である。明和四年の句。

○道楽な紋を久兵衛附けて着せ

(八五・三七)

芝居の「八百屋お七」役の着物の紋は「封じ文」であるから道楽な紋と言ったもの。この紋は若女形嵐喜代三郎が宝永の頃、「傾城嵐曾我」で、お七を演じ好評を博したことに端を発している。久兵衛は八百屋お七の父親。明和五年の句。

○虎坊としこなしで呼ぶ鶴の丸

(二・二七)

朝比奈三郎が十郎祐成の愛人たる大

磯の虎御前のことを呼んでいる様。

鶴の丸は朝比奈の異称として用いられているが、実は中村伝九郎が朝比奈役として出演した時に着た鶴の丸の大紋素袍に由来している。

鶴の丸の句は、これ以前に万句合に詠まれているが「柳多留」には取られなかった。

鶴の丸無理な烏帽子の置き所

(宝一三・桜一)

若殿のやうには見えぬ鶴の丸

(明元・鶴三)

その頃の二番生えなり鶴の丸

(明元・義三)

右は役者紋の句であるが、一般の町人紋はどの様に見られていたかというに、特定な家紋を以て詠まれているものは殆どなく、これは川柳点の風俗吟において庶民を家柄又は個として捉えず類として捉えている反映ではないかと思われる。即ち、その日暮しの職人風情には家紋などはどうでもよい。拘泥しないという処である。何でも

出来合いのもの有り合わせの物で間に合わせで置けというのであろう。

○出来合いの簞笥はどれも鶯の紋

(七・三)

この句の前句題の「用に立ちけり」がこの辺の消息をよく語っており、

美しい顔にすった紋を付け

(宝十三・松一)

長局我が定紋は棚へ上げ(明五・礼四)

——前句題「望み社すれ」

持った嫁今日は藤だの桔梗だの

(二八・四)

右の句などは女性に於いて特に然うであったことを示すものであろう。

尤も、商人にあっては暖簾というものが重んじられた故に、店を代表する商標を必要としたので、家紋が商標となっていた場合にはその商標で以て詠まれている例が若干見られ、万句合には、越後屋敷服店の商標即ち三井の家紋を詠んだ句、綿つみは井桁に三の傘をさし

(宝十三・松三)

老町は井桁に三がひら／＼し

(明四・礼五)

駿河町井戸の印を出して置き

(安五・宮二)

右の三句が発見されるが「柳多留」には、採られなかった。

武士の家紋は、その家の伝統や權威につながるに反し商家の商標として、の紋章はその利益に関する場合が多い。

商標の家紋の明和川柳点の句を一句立ての句として収めたのは「末摘花」であって、

○草臥れた夫婦のそばに四つ目ゆひ

(末初・一四)(明五・智六)

四つ目結は、両国に於いて井守の黒焼の元祖として知られていた四目屋の商標であり、ここで売られる娼薬長命丸の俗称四目薬はこの商標的紋章に由来するものである。

右の句は、四つ目薬の枕元に置かれてあることによって、夫婦の草臥れたのはその効能の結果であることを暗示したもので、この句の穿ちも其処にあると言えよう。然し、この種の句には、穿ちよりも人間生活の隠微な点を暴露誇張して滑稽化しようとする傾きがあり、その好見本が次の句である。

○四つ目屋の機能おめき叫ぶなり

(末初・一四)(明七・仁五)

ここに於いて、四つ目屋という屋号そのものが商標に由来し、その店、そこで売る薬を意味し、更にその薬効を連想させる言葉となっている。

川柳点に於ける紋章名及びその語の断片

の存在意味は発句（俳句）の季に似た作用をもつものであつて、川柳点に詠み込まれたこれ等の語は、単なる紋章を意味しているものでなく、その紋章を以て知られている一族又はその中心人物を意味すると共に、その者の属性を連想させる焦点となつてゐる。

川柳点は人事詩であるから、発句の様に季語のもつ季節的連想や象徴性の利用を期待することが出来ない。この欠を補うものが紋章語であつて、この傾向は川柳点の類型化に伴つて生成発達を遂げたものであり、この紋章吟の展開は詠史吟又は詠史吟的な句に於て著しく、詠史吟の知的穿ちと結びついて、次第に知的遊戯に陥つて行く気配が感じられ、屢々吟詠の対象となる紋章になる程、その遊戯化と類型化が甚だしく、明和期はその過渡期であつた。

〔武家紋〕

紋章は発生的には一家一族の標識であつたと言われている。これは一族の旗印や幕の標識を見ても傾かれることであらう。

明和元年句合に詠まれた句、
〇ぎり／＼の所で常盤は色を替へ

(二・16)

右の句で、「色を替へ」が驚愕の余り顔色を変えたというよりも、白旗の源氏方から紅旗の平氏方に靡いたことを狙つたと、これも原始的な紋章吟と考えられ、この一語によつて、義朝や清盛のことは勿論のこと、源平盛衰の波瀾重畳が想起されると共に「ぎりぎり」の具体的な情景までも髣髴

と浮び上がつて来る。

〇幸村は生きる気でない紋所（九・21）

真田幸村の六連銭も死者に持たせてやる六道銭も一文銭六つである点を狙う。

〇鷹の羽の家中死すとも穂は摘まず

(八・11)

赤穂城主浅野内匠頭の家紋は違鷹羽、それと「鷹は死すとも穀を啄まず」の俚諺とを掛ける。

右は、いずれも連想句に過ぎず、幸村最良、義士礼讃から発したもので、対象に好感を以て常識的態度に臨んだ場合には、この様な平凡な句となつてゐる。

同じ六連銭を詠んでも、

銭つかい上手にしたは安房守

(三五・20)

真田安房守昌幸は、関ヶ原の合戦で長子信之を関東方につけ、次子幸村を大阪方につけ、勝敗に拘らず必ず子孫が残る方法を考えた。

右の句になると、人情の機微に触れた句となる。

又、「うき世なりけり／＼」の句に附けた句として見るならば、多少採るべき点もあるが、

〇仁王門そのかみ藁のあつた所

(八・39)

昔の藤堂家の跡は、上野寛永寺の仁王門の辺に あつた。藤堂の紋は藁。

この様に附句だけ独立させてみると、歴史的事実を詠んだだけの句になつてしまい、藤堂と言わず藁としたのも語調から余儀な

くされたという処であらう。

川柳点で、徳川時代の浪人がその紋によつて詠まれているのは由井正雪ただ一人であつて、その点から見ると、大名級の人物であつたと言われる。但し、その紋というのも幕府顛覆の目的で、同志を集める策として自ら呼称した菊水の紋であつたから、

〇菊水もよくよく見れば手前染

(三・14)

〇手前ものだけ菊水の出来のよき

(八・5)

正雪は染物屋の伴であつたと言われている。

この二句は紋章が紋章として真正面から詠まれて、偽紋にしても正雪の異称とはいえないのは、苟も菊水紋を彼の代名詞にしたくなかつた江戸っ子気風からでもあつたであらう。このことは楠正成を詠んだ句によつても知られる。

川柳点で、大名に対する皮肉弄笑の痛烈なのは、仙台侯伊達綱宗と姫路城主の榊原政峯に対してであるが、「柳多留」の紋章吟としては微温的なものだけである。

伊達綱宗は所謂高尾事件に関し、高尾を意地のある傾城として喚称する余り、その飛沫を浴びせられ、その「竹に雀」紋に因んで、「雀」という異称で翻弄されており、これは演劇・俗説に立脚して詠まれたものであつて、勿論、史実などは問題にしていない。

〇三浦では吉原雀様と言ひ

(六・17)

吉原京町一丁目、三浦屋の高尾の上客として、高尾の意志に拘らず様主

では大歓迎。吉原雀は元来、よく吉原に通ひ内情に通じている者の意。

〇朝帰り竹に雀の鳴く時分（八・13）

明和期の紋章吟として最も多く読まれているのは所謂榊原高尾を身請けしたことが幕府に知れて、姫路十五万石から高田十五万石に転封された榊原政峯を詠んだ句であつて、仙台侯と比較して詠んだ句に、

〇米屋損すれど車屋損はせず（六・2）

仙台領は米の生産でよく知られていたもので、仙台侯を米屋とし、榊原の家紋は源氏車であるところから車屋と罵つた。

即ち、車屋というも、源氏車に因んだ綽名である故に、これを源氏車紋の変態句と考へて引用したのである。従つて仙台侯の損とは折角身請けした高尾を吊し切りにしてしまったからであり、榊原侯は隠居させら

品質優良

タチカワペン



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

立川ペン先株式会社

大阪市東区富町一丁目十一番地



・特集・

私のライバル

あなたは川柳でライバルをお持ちですか。ライバルは過去の柳人でも現在の人でも結構ですと言うアンケートに回答してもらったのです。

(編集局)

につくき奴ばら

大阪府 早川 清生

生来きらくなのか職場でもライバル意識は少ない。柳界でも各社の主宰は神さまのように近よりたいし、幹部たちも犯せぬ風格をもっている。誌上で小憎い句を吐く何人かを注目しているが、顔を見たこともないようではライバルの実感に薄い。既知といえはまず薫風だ。あいつは根っからの都会人だ。小器用な奴だときめつけられればよいが、中に本物みたいな句があるから困る。もっと勉強してからほんとうの絵かきか映画の看板かきかを見抜いてやろうと思っている。次に薫風が紹介してくれた時実新子だ。奥さま芸のきれいごとだと思っていたら、いつのまにか見上げるような成長をした。そのうちに彼女のよろいを突き破ってやらねばならない。役者がつけるよろいだったら、きらびやかで強そうでも紙と布でできているだろうから。

日満氏を目標に

米子市 小西 雄々

十三年ほど前、同姓の小西黄月という人があり、心ひそかにライバル意識を燃やして作句したものです。がいつしか柳界から脱落

されたので、現在の私は、ライバルというよりも大先輩として、河村日満氏を目標に作句を続けております。

毎月の川柳誌上でも、川柳塔の日満氏の句は繰り返して拝見し、句の構成、着想等に注目しておりますが、教えられるところが沢山あります。

年令、柳歴とも私より勿論上であるが、人を引き付ける人格と、現実の生活に取り組んだ句の多いのも私の尊敬する所以です。

お役所の人情汚職まで底いよその課に昨日の花見うらやまれ

この二句は、最近とくに印象に残っている句です。

ライバルとして早く競い合うところまで漕ぎつきたいと努力しております。

ライバルが多う

すぎて

堺市 吉田 圭井堂

地方には地方で川柳の支部があり作家の皆様はその句会で大いに張り切って居られる事と思いがたが中にはそうした支部もなく全然句会に出席する機会を持たない方々も居られることでしょう。

当地には本社句会があるばかりでなく各方面に有力な支部が沢山あって、足まめに行けば一カ月の内

十日近く先輩作家と顔が合うと言ふ恵まれた境遇にある私は倅せと申すの外ありません。

句会場へ出席することは非常に強い刺激をうけるもので又それだけに真剣にならざるを得なくなりその都度私の身体が作句と共に小さくなるのを感じます。

従って特定の人をライバルにして居ませんが強いて言えば句会場への出席者がみんな何時の場合でも私のライバルになっていきます。

オリンピックでは勝つことよりも出場する事に云々と言いますが私は川柳を作る以上誰にも負けなものをと思う意地ツ張りだ遂にライバルを少数に絞れないのです。これは欲張りでしょうか。

圭井堂氏と柳志氏など

高槻市 傍島 静馬

生命ある良い句をつくるために、諸先輩、或は新人作家の作品を、努めて多く読むようにはしているが、特にライバルを意識したことはない。吉田圭井堂氏とは、いつも本社例会などへ一緒に行くものだから、ある人から、句風もよく似ているし、年令的にも、ええライバルやと言われたことはあるが、そう言われてみれば、そうかとも思うのである。こ

の程度のライバルなら、例会でいつも決まったように、私の右隣りで、たがいに勝手な熱を吹き合っている。本多柳志なども、ライバルと言えるのではないかと思うのである。

本人はライバルなどと思わず

鎬を削った青踏君

大阪市 菊沢 小松園

良き古き時代、昭和も十年前後の私も若かった頃、今は消息もあり聞かなくなつた平井青踏君、何処の句会場でよく顔を合わせたものだ。そしてお互いに鎬を削つたものだった。一句一句に火花を散らしてそれこそ真剣に作句に精進したものだ。今日生活の息吹きの中に僅かに川柳に依つて慰められて居る昨今にはあの時代の情熱は出て来ない。併し今でもライバル意識は、若い頃のように火と燃えなくても、埋火にも似たものは川柳人としてある。強いて言えば四辺の柳人総べてが今の私には恐ろしいライバルであり、懐かしいライバルである。若い頃から形影相伴う清水白柳君には、妙にライバル意識が持てない人である。私自身が不思議に思う程、淡々として語り、淡々として別れられる。摩訶不思議な存在である。

路生先生を目指して

八尾市 西尾 榮

初心時代より相手も意識してライバルになって互いに切磋琢磨しあったことのない私にとって誠に淋しい限りであります。が、私勝手目録に大阪大川柳会時代笠原路生先生を目標に一生懸命句作したことであります。

先生の句に

六角堂幾何学的に暮れてゆき
なにかこのような句をと当時も今も努力してまいりましたが日暮れて道遠い遠いことであります。

同門の弟と競作

大阪府 川村 好郎

二十五六年前大阪新聞の柳壇に初めて投句した時以来の私のライバルは松江梅里である。大萬川柳会私は一回だけ東横綱を張ったが毎年梅里にトップを許している。負けてはいるがそんなに残念に思っていない。清記する梅里に類句を避ける特権がある。各地の句会の兼題席題に憎い程よく抜ける。たしかに私の負である。

命まで賭けた女でこれかいな
二号には逃げられ本妻にはほり
出され

梅里得意の女性に関する句であ

る。

思い出の道は避けたし通りたし

好郎

秤にも似たる女心のみたらなる

同

こんな句は梅里はよう作るまいと

鼻が高い。とにかく路郎師門下で兄弟が兄弟序ありを忘れて仲よく、いやライバルとして競作していることを併せと思っている。

齒のたたぬライバル

大阪市 山川 阿茶

自分の値打ちを自分で知りすぎますから崇拜する人はあってもライバル意識なんかどんなにうぬぼれてももてませんが梅里さんや好郎さんがきさきさんと私がよいライバルだとおっしゃいます。きさきさんともよい意味でのライバルとして勉強もしお互いに深く話し合ってみたいと言っ下さるのですが私としては一目も二目もおいてます。柳歴着想作句何れにおいても私の及ぶ処ではありません。大方でも敗け通し感心させられ通しと言うのが本音です。

陽は西に小銭と共に猿帰る

(きさき子)

小道具を上手につかわれるのと、言いまわしのうまいのに感心します。

齒のたたぬ人ライバルにしてし

まい

(阿茶)

曾ては笑泉氏

岡山県 直原 七面山

暫く川柳から遠ざかっておられるのですが、初心時代から約十年位の間私のライバルは(口に出して言ったことはないが)一緒に川柳をはじめた黒田笑泉氏(かつての不朽洞会員)であった。

当時私は肉体川柳に熱を入れていたのですが、氏は真面目にコッコツと身辺句をものにされ数え切れぬ程多くの佳句を残されています。中でも「共稼ぎ雪に長靴ゆずり合い」とか「谷川の水一尺の音を立て」などと言った句は今もなお私の記憶の中に残り恐らく生涯忘れることは出来ないであります。さて最近はこのことと言って特別何某氏と言うようなライバルはないのです。

強いて言えば 茗人氏

鳥取市 河村 日満

会社関係におけるライバル関係は、住友時代、日ノ丸時代ともに大いにファイトを湧かせての語り草もあるが、残念ながら川柳では初心から今日に至るまで一度も考えた事もないし、又感じた事もない、強いて言えば森田茗人君が私

をライバル扱いにしているようだが、句会以外雑談主義でモデルのない句は作らないことにしている私なので、川柳塔に投句のない同君を私の方からライバルと考えたこともなく、私がオス虎、彼がメス虎としての関係で毎月をつきあっているのが現状である。

ライバルと言う より兄弟子

岡山県 濱田 久米雄

川柳をはじめた途端にライバルと言うよりも兄弟子として添削や批評を乞うた人に岡田某人さんが

酒

清



灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

ある。短歌であらうと俳句であらうと詩、戯曲などなど、よくもまああれだけの文才があるものだとおそれ入ったものだ。昭和十年の本社忘年句会で、会場でさっさと

句箋に書いて出句し、勤務課の忘年会に出て行き、句が抜けたらばく代わって名乗ってくれと頼まれた。忘れもせぬ兼題は煙、鮭、丹前であったが三題とも天位に抜け十五点を取り最高点となった。賞品も某人ならぬ久米雄がこのご受取りに出たのである。この句は今でも覚えていりし、よくみんなに話して来たなつかしい思い出である。

紫香君こそライバル

大阪市 正 本 水 客

ライバルを語れという。年令、交友、柳歴からいって黒川紫香君をあげねばなるまい。三十有年たいたしたスランプも感じずに来られたのは彼あつてのこととも言える。私が澄んだ水の境地をねらうのに対して、彼の句はどこか、ぎこちないよういて、そのなかに言うに言えない温かさがにじんできているのは及びがたい。

ふと旅館誰かが起きた音になり小遣いを呉れるに姉は隅へ寄り粉な雪が障子の穴を抜けて来たここまでスラスラとすべってきいたベンが待てよと止まってしまったライバルという以上、あいつだけはという対抗意識が必要だと思いが、私は一度もそういう意識を彼に持ったことがないのでライバル

とは言えないことになる。姿三四郎ではないが、ひとに勝つより自分に……にである、私自身の心が私のライバルであろう。

水に散る落葉は水の色になり

川柳でのライバルは無い

大阪市 西田 柳 宏子

よく落語家が「基仇は憎さも憎しなつかしい」と謂う。ライバル意識をうまく表現していると思う。特定のそうしたライバルを持ち得たと言うことは幸せだと思ふ。悲しいかな私には川柳でこのライバルはいない。

去ったライバル

大阪市 金井 文秋

嘗てのライバルは不二田一三夫君だったが、諸般の事情から柳界を去ってからは私の川柳も虚脱状態が続いています。目下慢性スランプです。雑詠の投句も一年余り休んでいるのも其の為かも知れません。ライバルが去ったと言っても、私は川柳をやめる気はなく、権力でも続けて行くつもりです。まだ自分の作句力に限界が来たとも思っ居りませんし、いずれ立ち上がって、新しいライバ

ルを持つべきではないかと思っています。

今年は巳年でもありますので蛇にあやかっけて脱皮して成長出来ればと虫のいい事を考えています。

仲の良いライバル

堺市 八木 摩太郎

わたしの川柳のライバルと言うと、何と言っても、死んだ番衆の岡田鹿の子君だった。

それは小学校入学の時から六年間のクラスメイトだった関係もあり、文学愛好の幼友だった交際や、後年互いに川柳作家として共通の趣味だった関係で仲が良かった。お互い、異域同舟と言って笑い合ったり、仲の良いライバルだ



続・川柳書架

(60)

句集 黒塚

片柳 哲郎 著

★本書の巻頭には川上三太郎氏の「この清澄なる点滴」と題した序

私流の一本槍

大阪市 西 出一 栄

私はやはり明治調、男性の方が何かにつけて勝れていらつしやるという感想の持ち主。それ故男性の新人がぐんぐん上がって来られても不思議ではなし、若い女性に對しても世代の差には勝てぬと観念している故かライバルを意識した事はない。中年の方々にあの人と教養が違ふんだものと諦めて選者がどなたであろうと私流一本槍の句、しかしどこを抑えたらあんなよい句が出るのかしらとつくづく情けない時がある。でもたまに余計抜けた時は或る種の優越感にみたされるだけ私にライバルがあつたらもう少し句も向上していかかも知れない。

潜在性ライバルか

大阪市 本多 柳志

川柳作家としては格別に誰と意識して、ライバルを考えた事もないし、又反対に自分をライバル視している様な人も考えられない。併し句会などで、何かの都合で顔の見えぬ様なき、何か一寸した淋しさ、物足りなさ、と言った様なものを感じる様な人がある。斯ういうのが強いて言えば潜在性ライバルとも言えるのか知らん。税務署へ来てライバルとうまが合

文がある。

★本句集の目次を左に、

無縁坂——無縁坂・古都奈良にて・銀の鈴・敗走者・帰り花・華心猿・父子像

きさらぎ川——冬の花・さむらい記・真珠・めし・玉杯華がるとき・長良川畔にて・石くれ・映画・千羽鶴より——きさらぎ川・曼珠沙華・河童橋・風車

黒塚——雨乞い祈禱師・門・野仏考・姫山・白鷺城にて・真夜中のワルツ・黒塚・化身・大凶の籤瘦身の凶

★昭和三十九年十一月一日発行。

川柳史観

上野 鈍突 編著

★村田周魚氏の序がある。

★目次を挙げると、

まえがき・川柳の起源・万句合・

今までにライバルの題で抜けたのはたった二句

ライバルと妥協した日のよく眠れ

プロボースライバル先手打っていた

柳志

川柳時代年表・評語「武玉川」評風「柳樽」に就いて・「柳樽拾遺」に就いて・「川傍柳」・明治川柳発達史・アメリカ川柳の発祥。

★あとがきによると、東都の高須咽三味氏が原稿の手入れから校正まで一切のお世話をして東京で刊行されたもの。

★昭和三十九年九月二十日発行。

B6版・二四頁・非売品。発行人、119-18th ave Seattle Wash, 98122 U.S.A.・上野 潤次郎。★編著者是在シャトルの古くからの柳人。

万葉集

北川 春 巢 選

サラリーに耐えるわが手をじっとみる

宿毛市 渡辺伊津志

水取りに星窓越しにまたたけり

キャンドルの隙間の吾子の眼は清し

兵庫縣 常岡孝風

編む爪の先まで愛す愛されて

才女ワンマンゆくところあとぬぐう

大阪市 西本保夫

平社員にも押されるドー無抵抗

オールドミス遅刻とほとぼちゅうちよせず

島根縣 青山釣童

ジェット機を見上げてからの櫓がしなり

貧しさは言わず玩具の足の貝

大阪市 今西章雅

気が楽だ性悪説を信じよう

これからだこれからだのまゝ休止符

鳥取市 近藤秋星

春が来るのに不払いの社に勤め

いさかいを他所に戸外は雪しきり

玉島市 井上旭峯

嫁の肩持って老後を丸く寝る

仙台市 平野光道

酒屋そばの電話メモ貼り教室

食道も附設駐車場つくる

健康のための釣りです釣れない日

耕耘機の隣りに三ちゃん鋤振るい

大声で出初に酒の礼言われ

岡山県 永宗宗義

金金金守銭奴女をまだ知らず

頂天に百舌鳥の残虐見えて冬

ボールペン嬉しい返事へよく走り

老木の今売られ行く身と知らず

今治市 月原宵明

偽りを抱いて師走を急ぐ足

このまゝで居りたいイブの夜の仮装

とまり木で明日は言えないガード下

香川県 三井酔夢

惜しみなく愛し一生ひもを持ち

平凡に生きるわたしに電が降る

花道の長すぎ恋の手がしびれ

大阪府 早川清生

喝采しよう雑学の時代くる

積木一つはずすと日本中崩れ

古美術があるからお寺がある

大阪市 森川すみれ

聖歌うたう娼婦の顔にけがれなし

胸えぐる両刃の太刀の如き言

不死鳥の如く矢の立つ身を生きる

今治市 越智一水

石もって追われるごとし原潜よ

蜜柑つむ僕へ手をふる車窓

夫婦とは名のみ帰らぬ出稼ぎよ

京都市 大久保和三郎

ひとことをぬくめて帰る冬の月

靴音よ負けてはならぬきようがある



人間を連れて名犬散歩する

倉敷市 水粉 千翁

生甲斐の道を素足のまゝ歩き

実力を出さぬところを恐わがられ

神戸市 吉田 隆史

純金指輪売買ハカリ覗きあい

景気よく脱げば入墨怖れいり

石川県 大山 雅城

流行は敢てうつらぬ髪を結い

料理みな樹脂でつくった見本棚

大阪市 福井 野迷路

急がない人生だお茶でも飲むか

石川県 三宅 ろ亭

健康を風呂の裸に感謝する

京都市 室井 八九寸

霜に眠り給う菩薩赤い垂れ

名古屋 花東 千久良

三ケ日は妻のおしゃれも見てやる気

金沢市 根上 杏花

隣りから又ステレオで苦情が出

「方圓帖」の開設に際してお願ひ

北川 春 巢

今まで編集局にあって「人生譜」の名選をしておられた春三氏が、一身上のご都合で急に東上され選ができなくなったので、「人生譜」を廃止しそれに代わって「方圓帖」を新設するから「君が選をして呉れるように」と路郎先生からお話があった。

これは大げさな方かも知れぬが、私にとっては、戦争中に召集の赤紙が来た、という感じであった。全く青天の霹靂といつてもよかつた。そして「人生譜」に投句されていた方々の「人生譜」廃止を発表した以後に投じられた分をそのまゝにする訳にいかぬので「方圓帖」に收拾して選をさせて頂いたのでご諒承が願ひたい。

私は今まで丁度十年間、「近作柳樽」の選を、路郎先生のバックアップによつてやっています。「方圓帖」担当のことを私個人としての例を挙げさせて頂くならば、大病院に勤めていた医者が急に個人で開業をしたような感じである。患者さんは病院へ来ていたのであつて、私の所へ来ていたわけではなかった。それが個人開業してみると患者が少なくなるのは当然なのである。しかも、その見立てたるや、病院で指導を受けていた大先生と大差ないとすれば、なおさらであると思うのである。誰よ

りも私自身がよく知っている。患者の減ることは、医者には淋しい。

担当が代わつたので私は赤紙が来た時のようにびっくりしたが、同時にまた今までは違つた意気込みで、一生県命やつてみようと思つたのである。私としては何処までも巾広い選をしたいと思いますので、自由に作家の個性を発揮した句を寄せていただきたい。そして「方圓帖」に対し心からのご支援をお願いしたい。

浜田久米雄著 麻生路郎序



定価 300円
送料 50円

一著名作家の川柳句集一

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいまにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。

(切手代用可)

発行所 川柳雑誌社

振替口座 大阪 七五〇五〇
電話大阪 六〇八一



川柳の性根

後 藤 梅 志

わたしは昨年春にかかる前、前立腺腫瘍という厄介なものを除去する手術で、二カ月は入院した。そして、あとの静養もあり、まる一年は川柳から遠ざかってしまった。人の世の中で、一年というのは、短いようでもあり、長いようでもあり、さまざまな出来事が起きるものだ。ということをつくづく感じた。

まず根性ということが唱えられ出した。今までは余りそんなことは聞かなかったが、この頃は、一にも二にも、根性である。根性というのは、性根のことで、少し用

い方はちがうが大体同義語であって、昔からよく使われていたが、この頃は初めて覚えた言葉のようによく使われる。これは昨年十月に挙行されたオリンピックで、陸上や水泳の選手があまりにも意気がなく負けてしまい、それに反して、レスリングや体操の選手が奮い、金メダルをいくつも取ったり、女子バレーボールでは、大松監督の率いるニチボー貝塚の選手が、宿敵ソ連チームを二たび打ち破って世界征覇成し遂げたというようなことから、やっぱり根性だなあ!! というようなことになっ

たものであろう。聞くところによるとこの正月の初出仕では、どこかの会社の社長訓示も、大抵この根性の精神を注入することに懸命だったそうだ。定めて根性わるが世間にふえることであらう。ところが、根性とか性根というようなのは、一朝にして生れるものではなく、「なに養」とか、「石にかじりついても」という環境におかれて、云わば雨に打たれ、風に叩かれて生れるものだから辛抱がある。その辛抱が、今の世の中はむずかしくしているのではないか。だからよほどの覚悟がいる。今の民主主義の世の中では、そんなことは人権のじうりんだなぞということになり、まあまあ出れない相談だ。

ところで川柳の社会だが、この一年間社会から隔絶していた私に、ぶらり句会へ出席してみると、びっくりするほど、句が落ちてきた。これは墮落したというほどのことはなくとも、句に性根がなくなってきたことは事実だ。「川柳が面白くなって来た」という形で、先輩や、世の中の知識層から批判をうけていた。それが事実だったのである。川柳を作っている人には分からないが、作らない人にはよく分かる。これは一つの警告だったのである。

元来、川柳は俳句とはちがうといふことが、今もって分からない。これは大へんな打撃である。今の新進作家には、詩と、川柳の区別がつかない。詩は、西洋の詩から発展して来たもので、日本の川柳とは根本的にちがうという、これも分からない。

こんな簡単なことが分からないというのは、全くもって不思議であるというの外はない。こんな精神状態では川柳に生彩がなくなるのも当然である。

私はいろいろな書物でも読み、話にも聞いて、明治、大正の頃は、おろか、昭和の初期の川柳家でも、すこぶる知的だったことを知っている。

この知的というのは、理くつをいうのではない。一つの真剣さで、理くつの這入りこむ余地がなかった。

友達同志も真剣だったし、だいたい意気にもえていた。世上の機微にも通じていた。

或る意味での達人で、生活を犠牲にしても悔いがないところまで、来ていたような気がする。

たとえその行為が職業的ではなくとも、立派に専門家だったのである。己れ達でなければ川柳は作れない!! この意識があって、生き甲斐を感じていた。ところが観察しても誤りはない。

川柳と俳句とはどうちがう。こんなバカバカしいことは、世上に

流布しなかったし、何かの雑誌、つまり専門雑誌に、そんなことが載っていても、川柳家は極めて軽視したと見るふしがある。

○

川柳は面白いということ。ここに性根の問題がある。これは自覚である。議論ではない。

川柳を止められないから作る。面白いから作る。この点はみな同じである。川柳にかぎらず、どんな芸事でも、或はパチンコのようなものでも、面白いからやるのである。但し執心に度合いがある。

川柳を文学的に向上させるといふことには、ここでは触れまい。それは諸君の努力次第でもあるし、素質もある。まず、おもしろいということに徹するべきである。

私の知ってる川柳家に、石井照平さんという人がある。川柳の句会へもよく来られるし熱心である。たしか八十歳以上で、この頃は足許もあぶないが飄々乎としてよく句会へやって来る。この人の句に

頸筋に見惚れ八階まで昇り

という句があって、いつ思ひ出しでも笑いが止まらない。ご本人はそれほどに思っていないと見え、こつちから訊くと「そんな句がありましたなあ」という工合で顔るたよりないが、作句の話になると大変な執心で、ネットをあげてく

る。こちらが辟易するぐらいだが止めない。この人は過去に於いて黙平という人の川柳は「芸」になつていといわれた人で、少なくともこの句なぞは追隨を許さないものがある。

誰にも盛りというものがあつて、飛竜に乗るような調子が出てくると、素晴らしい句をひねり出すものだ。或る意味に於いて、素質は誰にもあると云い得るが、要は熱心の問題と、今云う性根の問題で、徹することが出来れば、前途はひらけようというものだ。

五、六年前に、大阪市の文化祭市民川柳大会で、あつという句に出会つた。

選者は近江砂人さん。題は「くせ」。平抜き句の中で、

アルサロをやめても人をつねるくせ

という句があり、あとから挨拶に増上に立つた路郎主幹も、「いまそこで披露を聴いていると面白い句があつて、川柳は実に愉しい」とこの句をはめて居たかに思うが、平抜きの句にも実に面白い句がある。

要するに字句のとり合わせで、こんな句にもなる訳だが、川柳には一字も余分な字は禁物である。句を生かすという点からは、誰も頭をひねって字句をととのえるのだが、成功、不成功の場合があつて、凡知の及ぶところではな

い。ただその人のもつ執心の度合いといふことができる。

○

川柳は十七字。俳句も十七字だが、同じ十七字でも、国語体で字句を駆使するちからというものは、川柳は俳句の比ではない。なにかなく、下五字の働かしはすばらしい。

胸を打つのも、膝を打つのも、アハハと笑うのも、下五の働きであつて、十七字文芸の大きな要素となつてゐる。

破調の句であつても、この点と同じで元来、十七字の詩は、日本人のもつ大なる遺産の一つである。この点は、偉大なる先人に感謝して精進するのが、むしろ当然であらう。

元来が、ひとりの女を、わが棄ろう中のものとするにしても、手くだけばかりではいけない。親切心もあれば、真実もいる。まして男の働きなぞというものは、いちばんだ大事だ。

ここに、引く呼吸、吐く呼吸といふものがある。阿咳の呼吸といつて、それは相撲ばかりではない。句にもそれがあるし、だいたい、川柳の場合、その十七字を構成する、一字一字は、呼吸しているものだという信念に徹する外はない。

○

いつだったか、番傘の梅田句会で、「天国」という題が出たこと

があつて、いろんな面白い句があつたが、その中で

天国は 星を磨いて大掃除

という句があつて、ヤンヤと一同手を叩いた。虚構の句で、こんな面白い句はないと思つた。所謂、句会の熱気が、こんな句を製造するである。

○

こんな句ばかり蓄めていては、お前は阿呆か、と云われるかも知れないから、こんどは、川上日車さんの句を引こう。

この人は、人も知る柳増貴重な存在だが、その多くは主観の句で占められていて、願る名句が多いが、私はこの大部分を筆写している。その中で私が心を打たれるのは、次の句だ。

昔知るだけに哀れな枕許

日車

私は頗るウエットの方で、こんな句には特別ひかれるらしい。

その何びとかは知らないが、そくそくと人を打つものがあつて、枕許には牛乳壺でも転がっているかのような感懷をもよほすのである。又

捨てられて冥加にあまる乳を呑み

日車

というのがある。やわらかな筆致で、千言万言にまさる効果があつて十七字文芸も極まれりと云うべきである。捨て児が富貴の人に拾われたという幸運さが、しみじみと出ている。なんとも深い淵へ引

つこまれそうな、私も川柳家と生まれ、こうした句を味わう幸福さを、感じたものだ。

日車さんの句に対して、少ししつこいが、もう一つ引こう。

すてし反古土にまみれて今日もある

日車

○ 語の方で、「引く——や。」

「押す——や」というのがあつて、単に一字をいうて、押す場合と、引く場合があることを云う。その表現はすこぶるむずかしい。

つまりこうなので、引く場合は、ハッと透胸を衝かれた形。

——押す場合は、ビックリした場合と解釈してもらう外はないが。語では、単にこの「——や」という字をしはば最も短い言葉

(詞ば)としてやらされる。

以上の三句は、日車の客観句では、最も白眉なのであらう。

息をつめて、じつとみる。それは客観から、主観にかわるせつ那であつて、作句の瞬間に、電光石火のようなものが走る。

こんな句は、客観というてよいのか、或は主観というがよいのか、かつには断定出来ない。日車それ自身なのである。

○

秋さらりさらり机上整理の手まったく、愛唱おく能わずの句だが、今の時代の人は、こんな句材を、どんな風に作るのであらうか。

○ 私は大阪府立病院に入院して、二カ月暮らし、感じたことがある。

それは、病気をする人が、夥しくおいということ。患者が、うようよしている。

医者が走り、看護婦が走る。

患者はというと、ベッドに寝ているか、廊下で待っている。全く人間として、なさない状態だ。

こんなみじめなことは、二度ふたたび味わうまいと思つたが、病気をすれば、いやが応でも、病院の門をくぐらなければ、ならない。

要は、病気をしないことだ。

これが果たして出来るか。云わば、これが勝負どころだ。

人生は、つねに勝負で、川柳も、これにつながるものだ、といふことを感じた。

(おわり)

車
福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番



明治川柳

と風俗 (1)

奥津啓 一朗

新華族
明治十七年七月七日に華族令を定め、公侯伯子男の五爵とした。けれども爵は華族ではなく、爵を授けると華族に列するという辞令が同時に下るのである。

新華族もとは野に臥し山に臥し 佐波
と詠んでいる。
二三人子爵が並ぶ目論見書 三太郎
伯爵のまだ若くして式部官 萬雄
伯爵の伯父へ苦学が寄りつかず 剣花坊
鷹揚なところが華族の値打なり 千二
筈の株を戦後の華族とり 瓢乎
又その台所を 子爵家に娘を上げる成上り 春花
平民へ華族の令嬢天下り 雅笑子
と、いつの御世にも不孝者はいるとみえ 嬰爵を待遠しがる不孝者 虹児坊
別荘の出ものを探がす新華族 自慰庵
という句もある。
娘義太夫 久良岐

明治三十三・四年は其全盛期で當時府下の席亭の三分の一以上を此娘義太夫席で占めるといふ勢を示していた。

厚化粧極彩色、黒の紋付に萌黄の肩衣という高座着の絢爛、緑なす大島田や、銀杏返しに、紅い花簪が揺れて行くところ、豊かな肉声に恍惚と魅せられて、学費一切、下宿代まで使い尽して終うものもあった。

九分迄は義太夫の顔眺めに来 楓林
女義太夫余りもがいて櫛が飛び 三日坊
島田鬚拍手の中に泣きくづし 吞叶坊
かんざしをふり落すのがお景物 駄六
合の手で女義太夫びんをかき 三日坊
肩衣をこくは指輪を見せるため 才喜
海老茶美の太夫コップで水を飲み 哲の坊
もう叩く頃とサワリの首を伸し 始ン坊
女義太夫茶屋で猫をじやらしてゐ 三日坊
素人になつても兎角胴圓声 久良岐

川柳不朽洞会

(現任)

指導 麻生路郎

賞助 長谷川一徹

石川侃流洞

弘津柳慶

中村祐吉

市場没食子

安岡瑠枝郎

杉谷湖山

岩崎愛二

若木多久志

河村瑞川

小沢史占

中村直勝

黒川紫香

木村千容

大鶴喜由

井上吉次郎

若柳潮花

野村味平

小野文水

島浦精二

西無鬼

福田丁路

富岡淡舟

恒藤恭

八木摩太郎

佐野白瓢

飯降竹青

前田勇

北川春巢

平尾太希志

西辻竹光

山本雨迷

後藤梅志

木口賀峰

阿万麿光

山路閑古

寺井鋭々

小西雄々々

林野麿光

柴谷幸二郎

古川麗花麗

菊田いさむ

阿万麿光

橋本緑雨

前山北海

岩崎一伸

福島鉄児

高鷺亜鈍

三輪峯園

金井文秋

青木遊星

沢田四郎作

井上湧三

伊藤茶仏

大森娘句楽

東野大八

西垣鯉風

那谷光郎

長谷川三司

中島紫痴郎

築山快夢起

福井野迷路

若林草右

戸倉普天

市岡晩舟

麻生アト

益永貞女

奥村丹路

藤本満年

山田鳥善

山田鳥善

河野春三

羽佐間柳葉

大西八歩

山田鳥善

上田翠光

福田妄夢

石曾根民郎

田村藤波

木村孤浪

吉田圭井堂

布施筑川

白井三林坊

戸田古方

国広半休

桜川米雄

下山村潮

西尾榮

長淵貴山

浜田久米雄

本田恵二朗

上田翠光

友淵井蛙

菊沢小松園

松川杜朗

木村孤浪

太田良山

清水白柳

馬場夢生

戸田古方

直原七面山

新川恒明

森本法泉子

西尾榮

河村日満

尼緑之助

小池しげお

不朽洞会員

特別委員

特別委員

特別委員

量價の常連が、切前(もたれ)を語って、例えば酒屋のサワリまで進み、「今頃は半七さん、何処にどうしてござらうやら……」と、表情に富んだ美声を転がすにつれて、「ドースル、ドースル」と掛声の共鳴から、所謂堂摺連という徒輩が生まれた。中には風雨に構わず十五日を通い通すもの、真打の断持ちを追いかけて、深川から浅草、両国から四谷と、一晩に奔走する連中もあつた。



謎を解く鍵

八木摩天郎

郷土の生んだ人の史実や、その人と成りを後世に伝える事は勿論大切であるが、永年の日月、その事績が判らなくなる事は遺憾の極みである。私の郷土堺にも、持って生まれた機智とユニモラスな気風で知られた曾呂利新左衛門。

堺市史には杉本甚右衛門或は彦右衛門、和泉大島郡の人、堺の目口町に住んで

女浄瑠璃学生七分占領仕 多八庵
堂摺が顔と声との艶に酔ひ
堂摺は手拍子打つが自慢なり
堂摺連太夫を尻にして怒鳴り
楓 林
客種の九分が書生であり、各席の堂摺連も数十人となり、連中の腐敗堕落が余りにも増長したので、警視庁でも、これと同時に流行の源氏節の取締を厳にし、各席亭に対しても厳重なる諭達があつた。

二十二日堺市市之町東三丁二十五番地の邸で死んだらしいが、確固たる証明する事実も出ない。そのりの作つた鞘も、奉納した額も明らかに判らないので惜まれている。
天野屋利兵衛
元祿の昔任侠の典型天野屋利兵衛、赤穂義士が目出度本懐を遂げたのも一に利兵衛の義侠である事は、人のよく知るところ
天野と大野一劃で大違い末世まで天利に叶う義士の徳
などの古川柳もある位であるが、この「天利」(天野屋利兵衛の略称)も、承応二年、泉州堺港に生まれ、大阪の商家に奉公、独立して淡路町河岸で海産物を営み、大阪北組の惣年寄ともなつて、晩年京都で余生を送り享保十二年歿とあるが、惣年寄に実在の人物はいる。しかし、討入の数年前に、何らかの過失で辞任、実在の天野屋利兵衛は浅野家と関係なく、義士討入を援助した話はフィクションと見る説も多いとあつて、一体この謎は誰が解くのか、天野屋の後の松水の姓は、その使用した算盤は一体誰のもの……この謎は?

竹内圭三	浜野奇童	橋本幸男	高崎雄声	高橋操子	藤井明朗	永松東岸	野田素身郎	永藤弥平	神谷凡九郎	清水望峯	木村十悟	伊達堰子	坂田東洋男	志水礼司	酒井ひか平	深見雅堂	津秋六花	丸川初甫	笹野旭泉子	新岡回天子	池田古心	石居高志	早川清生	西田清一	酒田清子	平井井平	阿部柳太	西田柳宏子	辻圭水	松岡委滄浪	見島与呂志	野々口美舟	小浜牧人	菱田満秋	前川左文字	
平田三十郎	西尾青一路	橘高薫風	中村九呂平	多田はなみ	山田伊三郎	宮口笛生	榎本露児	石坂新雪	城内吾柳	西川晃	田中蛙眠子	野田一念	山本立児	林葵丘	仲どんたく	久家代仕雄	本多柳志	原独仙	大谷月都	江国幽谷	光好陽子	河相すむ	野呂舟遊	樋口むじな	高野白溪子	辻野白溪子	吉原紅月	竹内千里	石倉満潮	魚住旅風	田中狂二	林昌男	村上旭童	福田多可志	森田若人	岡嶋芳道
北村三歩	石井かん人	本田清人	浅川八郎	内藤きさ子	木村涼人	城島一舟	牛島京舟	唐崎専翁	奥谷弘朗	藤岡花梢	岩田美代	松本吉太郎	置田ふじ	達山可住	河原みのる	隠岐不醉	田中十方	伊集院良	清水一保	清川晃男	柳染鶴丸	都倉秋女	大江磯石	中塚磯石	松田半月	越智一水	山内静水	森川すみれ	細呂木魯木	高木桃正	小林孝正	有仙正	賀本芳仙	宮川珠笑	西村句楽坊	

集路一

選者
西田 尾 方 大
辻 垣 圭 水



君が代

西尾 栗 選

君が代で泣いた日もある労働歌 不二
君が代と浪花節には飽かず老い 真砂
君が代がスポーツ歌になる哀れ 野迷路
音痴でも君が代だけは節がつき 光郎
君が代と名付け和菓子色の艶 李鳥
君が代は知らずあちらの歌うたい 同
君が代へ紋服正す時津風 八九寸
君が代にはじめて目頭熱くなる 雅城
君が代へ民族の血は争えず 章雅
君が代へ外人さつと脱帽し 与志
君が代斉唱明治生れのノスタルジヤ 釣童
君が代はせいが大きくなりました 雄声
君が代は畏れ多くとも言わず 同

変る世に君が代だけは千代八千代 木魚
君が代がきけて戦後も二十年 ろ亭
君が代をうたえば裏切り者にされ 宗太郎
君が代を兵の遺族としてうたい 同
君が代もうたえて國見明日旗日 滋雀
柔道を君が代だけにさせとかず 可住
君が代も知らず子供は卒業し たけお
低音で君が代うたい高校生 光道
優勝の君が代をきくバチンコヤ 春己
君が代が流れ何事かとテレビ 雄々
感激もなく君が代をきく若さ 涼人
親善を国歌で結ぶ国と国 藤波
君が代に情熱あつた嗚呼明治 句楽坊
染まり切らず君が代うたっているお国 千久良
外国で聞く君が代はデンとくる 代仕男
君が代の歌詞へ甲論乙駁す 十九平
君が代へ表彰台の健康美 惠二朗

君が代をみんなて歌おうよい日本 旭峯

人

君が代が来賓席で揃わない 千翁
君が代へ俺もテレビも泣いている 可住
君が代が戦前と戦後をわけ 判志

地

君が代のない式典は物足らず 旭峯
君が代を唱わせP・T・A・がめ 雄々

天

君が代と日の丸投書欄でもめ 十九平

押売り

田垣 方大 選

信念を押売り社長嫌がられ 万竿
押売りへ柔道五段の額をかけ どんたく
押売りをあわてさせているかなつんぼ 野迷路
食うための無理と押売り知って売り 李鳥
押売りとはもつての外と居直られ 章亭
押売りが帰つていそいで錠をかけ 弘村
押売りはしません押売り付いてくる 木魚
割当てと云う押売りをされてくる 信二
押売りのセリフはみんなムシヨがえり 映輝
押売りの髭を剃つたらしい男 可住
助産婦に押売り外へ突出され 春己
押売りの何処から借りて来た子供 涼人
押売りへ二階の学生さん呼び 晃男
押売りに甘く見られた妻でよし 酔夢



柳志寸言

本多 柳 志

◇スポーツは見るものでなくて、行うものである。川柳は詠むものでなくて作るものである。

×

◇頭をつくる美容師にも、家をつくる大工にも所定の国家試験がある。国民生活に一番大事な法律をつくる代議士に、国家試験のないのはおかしい。

×

◇川柳家のくせに、こんな事がわからんのかと云われた。女のくせに、教師のくせに、大人のくせに。よく考えて見たいことばである。

×

◇人が犬にかみつけばニュースになるという。事故死五人ではニュースにはならないが、死者がゼロだとニュースになる。おかしい世の中。

×

◇気がついて見たら、はやっていたと云うのが流行と云うものである。いつの間にか寛容と調和の世の中になっているのが、政治と云うものであろう。流行や政治の振れ太鼓は戴けない。

押売りに同情をする過去があり 藤波
押売りもあわてて逃げた高い 不二
押売りに凄まれてからの固い錠 千久良
押売りがはだされ涙顔となり 譲士
押売りの時には泣きの手も使い 古心
押売りの有線ニュースに舌打ちし 釣童
押売りをして集金に苦勞する 愛鳩
深呼吸して押売りは扉あけ みつお
押売りがボナナス貰ったことも知り 十九平
押売りへ居留守の主人顔を出し 同
押売りは致しませんが強気なり 雄声
押売りのよう仲間説きふせる 同
耳遠い祖母に押売り苦笑い 光郎
腰かけてから押売りは荷を開き 光道
押売りも坊やの頭なぞで去に 秋月
押売りもガスライターというを持ち 痴亭
泣き喚めく児が押売りを追ひ払う 八九寸
押売りのモミ手入墨ちらつかせ 同
押売りを三ッ指ついたままにらみ 宗太郎
押売りへ財布の底を叩いてみ 同
押売りを一人芝居で追い返し 句楽坊
履物の偽装に押売りひっかかり 同
押売りが有線のある村を避け 代士男
押売りの買うまで煙草吸い続け 同
気前よく買われ押売り苦笑い 恵二朗
押売りのように娘を見せに来る 同
押売りに男の靴下駄ならべとき たいお
ハイライト喫う押売り腹が立ち 雄々
押売りの露地より裏道辿って来 与之助

五 客

押売りへ不精髭も役に立ち 保夫
押売りに格好のいいヒゲがあり 千翁
押売りにすこまれましたたわし 光郎
押売りを見つけて帰宅ちとのぼし 宗義
押売りを帰した母の遠い耳 旭峯

人

俄雨押売り一人ぬれて行き 与之助

地

押売りが来たので肩身広うなり 千翁

天

押売りが居るのに雨が降り始め 伊津志

見送り

辻 圭 水 選

見送りは口実酔って帰って来 隆子
人知れず見送り最後まで残り 宗義
出張を見送る妻に隙がない 千翁
退院を見送るたびに焦り増し みつお
むせび泣く見送りの娘をもて余し 杏花
一競走見送り次の穴にあげ 雅城
見送りの後のほてなき孤独感 痴亭
左遷地へ部下の一人に見送られ 譲士
見送りへ母は涙で念を押す 代仕男
すぐ泣くと母の見送り嫌われる 万竿
見送りの母がみすばらしく見え 伊津志
怪我しなや早よ帰りやと送る母 えつ
見送りの母が厭弁買うてくれ 李鳥

見送りの子供みやげに念を押す 同
何時迄も見送る母が小さくなり 兎男
見送ったあとは子供と強く生き 野迷路
見送りの坊や乗り度い羽田港 勝子
見送りに妻を行かせて義理が 愛鳩
見送って涙流すも母なれや 雄声
見送りを押しわけ売子必死なり 雄々
見送りの顔ぶれにみる義理利権 八九寸
アイデアはよいが見送る十二月 木魚
又来てねと金のあつた背なの声 滋雀
見送りを背に感じつつ闇に消え 古心
見送りが済んでホームへ水を打ち 松風
見送りに来て内幕がばれかかり 凉人
見送りの眼をさけ彼女次郎から 句楽坊
クビにする肚の課長に見送られ 真砂
手を出す早いとチャンス見送らせ 章雅
たすきには長いと採用見送られ 同
眼と眼又逢う日までと手をにぎり 歌子
羨望の眼全快見送られ 春己
見送りにあらず追い出すように閉め 光道
借りた金の言訳もして見送りに 同
許されぬ人がホームの蔭で泣き 旭峯
手を振っているのに汽車がカーブする 同
義理で来た見送り後も見ず帰り 光郎
出勤をもう見送らぬ妻となり 同
つきそいも一人前に見送られ 可住
見送りの方が装い派手すぎる 十九平
義理で来た見送り受付から帰り 同
見送りを泣かせて帰す発車ベル 藤波

来年へ見送る娘の星めぐり 同

義理だけの見送り名刺おいて去に たいお

五 客

まだ別れられず三台見送って どんたく

赤帽の稼ぎを見送り邪魔をする 雄々

見送りの筈が二駅乗り越して 釣童

銭別を渡して義理はすぐ帰り 静波

見送る間にタンス二割高 雄声

人

見送りへ補欠も派手に帽子ふる 宗太郎

地

米転の見送りなのに泣けてくる 恵二朗

天

見送りの派手に税金使う旅 不二

軸

なにもかも見送り政治のせいにする

色紙短冊
書画用品
大坂戎屋
丹 喜 堂
を申せしむ

柳界展望



本社新年句会に於いて昭和三十九年度優勝不倒銅杯を授賞された。
本多清人氏

句会

▼本社二月句会は八日(月)午後六時から千日前電停東入ル自安寺で開催する。寒気を吹っ飛ばす意気込みで柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。

▼七面短詩型文学クラブ川柳部新春句会(和歌山市)は六日(水)午後五時から北ノ新地朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)新春句会は二十一日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。

▼コクヨ川柳会(大阪市)新年句会は二十九日(金)午後六時からコクヨ第二クラブで開催。▼大阪通信病院川柳会新春句会は二十三日(土)午後二時から南館一階別室で開催。▼川維備前支部(岡山県)新春句会は九日芳月居で開催。

▼第二回どんぐりOB句会は一月二十四日(日)午後一時から大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大萬で開催。▲九日熊日柳増開設四十周年記念新年懇親会は一月十日(日)午前十時半から熊本市百貨店大洋六階特別食堂で開催。

▼川維岡山支部新春句会は一月十六日岡鉄クラブで開催された。

▼川維下関支部新春句会は一月十七日に日和山職員会館で開催。

▼川柳きやり吟社(東京都)四十五周年・周魚主幹喜寿祝賀記念句会は昭和四十年四月四日(日)正午から国電上野公園口前、東京文化会館で開催。兼題は展覧・おだやか・はればれ・おしやれ・花と生活、各題二句、席題は三題当日発表、投句は百円封入の上、三月十

五日までに、東京都千代田区東紺屋町二七野村圭佑宛。▼「呉柳」(呉市)百号記念川柳大会は一月二十四日(日)正午から呉市国民宿舎音戸ロッジで開催。▼富柳会(富田林市)新春句会は一月廿四日午後一時から富田林毛人谷、松本吉太郎居で開催。▼中日川柳発刊百五十号記念第一回誌上大会は、兼題、鍋・馴染み・儲け・はや・安心・静か・真似、各題三句別紙記入の上、二月十日までに名古屋市西区菊之尾通三ノ三八中日川柳会事務所宛、投句料百円(発表誌呈)。

▼川柳噴煙熊本市)新年号は昭和三十九年度年間秀句抄を掲載。▼第九回柳都実力王者競詠が柳都(新潟市)一月号で発表になり、定金冬二氏(津山市)が優勝された。

▼川柳腕ぐるうぶ(岐阜市)では目下、現代川柳を志向する鴨平賞作品募集を下記により発表している。(一)未発表作品一人一篇十句(二)応募制限資格なし(腕同人を除く)、(三)賞一席一名、賞杯・八〇〇〇円、次席二名、賞杯・一〇〇〇円、佳作五名、今井鴨平作品集、(四)審査腕ぐるうぶ、(五)発表「腕」誌上、(六)〆切二月十日(鴨平忌)、(七)宛先岐阜市加納本町九丁目下条方鴨平賞作品係。▼第七回花童子賞の作品募

集。参加資格川柳はこだて昭和三十九年一月号より十二月号誌上掲載句(雑詠、課題吟、句会報等)に限る。◇右掲載句より各自自選五句投吟の事◇各句下に発表号及びその頁必記◇恒例の大家十二選者共選とし、最高点の方に花童牌以下、二、三位に呈賞。◇〆切二月廿八日◇発表本誌六月号、◇投句先函館市青柳町一七函館川柳社。

消息

▼橋本緑雨氏(大阪市)は軽い老人病で医師から注意されておられるが、近々路郎先生をお訪ねしようと思っていると。▼藤村〆女さん(大阪市)は旧臘十七日から南紀勝浦、那智の滝、椿温泉へと巡遊、勝浦温泉では混浴で西出一栄さんの句の、「混浴ヘタオール一本たよりにし」の通りでした。▼北川春葉氏(大阪市)は副院長と内科医長の多忙の中から「評論新聞」二月十五日号に「正月の川柳」と題する随筆を執筆された。

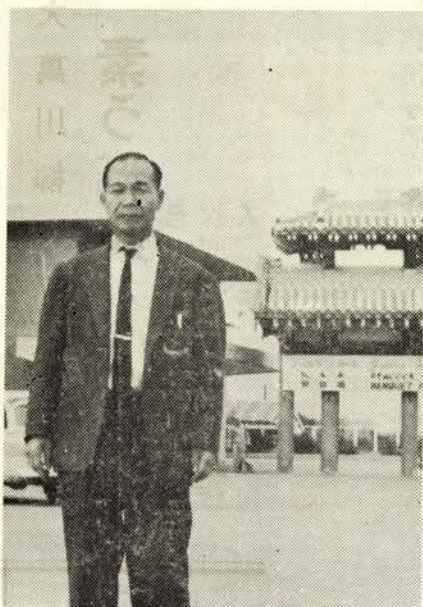
▼若本多久志氏(西宮市)は新年早々夫人同伴、愛用車で九州路へ。八百軒の行程は些かこたえたが、阿蘇高原のドライブウエーを時速七、八十軒でとばした快感ですべてを忘れました。宏大な大自然の中にしみじみとした人生感を味わい得たことも年頭のような喜びでしたと。▼高原の中に自分が小さ過ぎ」▼工藤甲吉氏(青森市)は一月十三日二日がかりの会議のため湯河原へ。十二日には帝国ホテルで前統合幕僚会議議長長敬三氏の「国際軍事情勢とわが国防」を聞かれた。新春号は十日に拝覧、遅刊挽回のご努力に深い敬意を表します。川柳界に於けるアベベの如き師のご健闘にはただただ頭が下がるのみです。寒さの折柄〆養生専一にと。▼大谷月都氏(岐阜市)は一月一日付をもって名古屋支店長に栄転赴任された。

ご便利な贈りもの 近鉄の商品券

- 大阪アベノ・上六両店をはじめ四日市近鉄 和歌山近鉄 別府近鉄 徳山の松下百貨店にもご使用いただけます
- 1,000円から10,000円まで各種
- クーポン式の小額商品券もございませう(商品券のご用承りはアベノ上六1階)



不朽洞の人々



九州康行会を主宰する佐野三造氏（八代市）

信念を通して義理に強く生き

（ト 占）

熊本県独自の言葉に肥後モッコスと言うのがある。関西で言えばへんくつと同じことだと思ふ。近頃私も肥後モッコスの一人に数えられている。家の者や渉外部員が学校へ訪問して先輩の先生達から聞いて来るらしい。正しくまっすぐに世渡りをして行こうと思うと多少変わった眼で見られても仕方がない。

終戦後自由我儘主義が横行して義理人情とか恩義などと言うことは遠い昔の夢物語だと思っているらしい連中が多いのには驚きもし又あきれてもいる。

（写真は沖崎にて撮影）

▼河野春三氏（東京都）は一月九日に一旦帰阪十三日夜東京へ戻られたが、十一日早朝不意に薫風の訪問に会われ戸迷われたが、午前の一刻を歓談された。▼河村日満氏（鳥取市）は本誌十二月号を一部鳥取市長に寄贈、市長考案の「新作傘踊り」が句になっているので大いに喜んでもらえた由。又、大西八歩氏が最近の句会で大いにハッスルをされての発言あり鳥取句会も活気が出て楽しみが多くなったとのこと。▼本多清人氏（大阪市）は新春句会の席上、路郎主幹から昭和三十九年度不朽洞カップを永久保持者として授与された。▼昭和三十九年度の本社句会全出席者は、下記の八名の諸氏

で、路郎主幹から、全出席を記念するため、各位に短冊を授与された。清水白柳、河井庸佑、傍島静馬、菊田いさむ、辻白溪子、松下たつみ、本多清人、浅川八郎▼若本多久志氏（西宮市）は尼崎商工会議所報に新春随想「古川柳にみる正月」を執筆掲載された。▼尼緑之助氏（出雲市）は一月十四日に、尼崎市へ来られたそうですが、奈良市への用件が長びいたので、不朽洞へ寄れなかったとのこと、この次の時は是非お立寄願いたいものです。▼金子呑風氏（上田市）は本年古稀を迎えられるようですが、旧冬愛妻を亡くされ淋しい日を送っていられます。▼金婚の夢は破れし今朝のひえ

の句を寄せられました。▼井谷みつお氏（羽曳野市）現在どんぐり会では五十名近い会員で、月二題の兼題と研究句一題を作り、互いに批評や川村好郎先生の添削指導を頂き特に好郎先生の指導の日を首を長くして待ちわびて居りますとのこと。▼江国幽谷氏（岡山市）から体の調子も大分元へ取り戻したので、川柳の勉強に身を入れたいと思って居りますとのこと頼りに接した。

句集

改号

▼今井鴨平作品集「人間像」が昭和三十九年十二月一日に岐阜市永田町二十一、令息の今井春雄氏方から刊行された。著者今井鴨平氏は短詩革命に一生を捧げ、私財を

▼田中敏行氏（不朽洞会員）は雅号を十方と改められた。

転居

▼小林孝正氏（新居浜市）は新居浜市中須賀スタンドやなぎ（電話八八四六番）へ転居。▼河野春三

味の川

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 04 6684

御集会には階上を御利用下さい

不朽洞会から

★新会員紹介（一月）

▼西村句楽坊（京都府）正

白柳氏推薦（多）

訂正

▲本誌新春号十頁上段三行目の句「日本がまた残り」とあるは「まだ残り」の誤りに付訂正。

▼内海敬太氏（京都市）は京都市中京区寺町竹屋町上ル白藤アパート内へ転居。▼大山雅城氏は石川県加賀市大聖寺町五番地へ中宮建築設計事務所を開設され寓居を加賀市大聖寺中新道二十六へ定められた。

氏（東京都）は東京都豊島区巣鴨六の一三〇三第一芳葉荘三号へ転居。▼大谷月都氏（岐阜市）は岐阜市近ノ島四三九ノ一へ転居。

第百六十七回

大萬川柳

兼題「素うどん」

入選発表

選者 麻生路郎先生
 投句総数 三百九十四句
 入選 三十九句

源 慶之助

飾り気のない素うどんのような母

篠山 可住

二日酔でつかと素うどんの肩叩き

羽見野 圭太

求人欄伏せ素うどんに相対す

岡山 七面山

素うどんていいよと悪友気をつかい

松原 万竿

にべもなくも素うどんはヤマでんねん

富田林 八郎

かけ一丁みんなが俺れの顔見てる

富田林 東雲楼

素うどんをすする屋台へ空っ風

石川 雅城

新店の味素うどんをとってみる

奥 甕光

大根足並らべて素うどん食べて去に

玉島 旭峯

貧相な顔素うどんの箸を割り

岡山 周甫

夫婦だけ素うどんにする子沢山

岡山 宗義

素うどんに礼を言われて恐れ入り

加賀 光郎

寒行の尼僧素うどんへ合掌す

石川 光道

二次会にはぐれ素うどん食べて寝る

大坂 章雅

素うどんに一決客も身内なり

大坂 小松園

素うどんて親子の身の上語られる

笠岡 桃里

素うどんのうまい町あり放浪記

大坂 阿茶

素うどんにしとく寝しな風呂がえり

大坂 柳志

一張羅で出て素うどんとも言えず

倉敷 方大

素うどんにしくデートのないゆうべ

神戸 隆史

素うどんか女フンと言うただけ

富田林 美房

素うどん代ちよつと借つたり借られたり

素うどんとめしパチンコに負けた顔
 素うどんの味なつかしい立志伝
 素うどんの客も一応メニュー見る
 素うどんが好きだという子のいじらしい
 素うどんも自前のときはうどんかけ
 ホステスも出来ぬ素うどん貸したまま
 催促も出来ぬ素うどん貸したまま

大坂 梅里

素うどんて次ぎのレースの策を練り

素うどんの夜食つきますアルバイト

素うどんへガヤガヤガヤと定時制

大坂 市郎

貸す金はないがと素うどん取つてくれ

岡山 宗義

素うどんが無死満塁に腰を据え

大坂 良

素うどんと言えない今日はモーニング

大坂 好郎

素うどんてええとドスンと旅かばん

倉敷 方大

見られなくない奴に素うどん見つけられ

和歌山 木魚

素うどんのは誰やと聞けば社長なり

大坂 小松園

素うどんの汁がこぼれた予想表

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

素うどんへ身の振り方を考える

大坂 小松園

大萬川柳ベストテン（一月現在）

- 一 梅里 二六、〇 大坂
 - 二 小松園 二六、〇 大坂
 - 三 きさ子 二一、五 岸和田
 - 四 静馬 一九、〇 高槻
 - 五 桃里 一六、五 笠岡
 - 六 好郎 一六、五 泉北
 - 七 晃 一五、五 大坂
 - 八 多久志 一五、〇 西宮
 - 九 美房 一四、〇 富田林
 - 一〇 柳志 一三、五 大坂
 - 一一 清人 一三、五 布施
 - 一二 方大 一三、〇 倉敷
 - 一三 宗太郎 一三、〇 石川
 - 一四 章雅 一二、五 大坂
 - 一五 阿茶 一二、〇 大坂
 - 一六 圭太 一二、〇 羽曳野
 - 一七 春葉 一一、五 大坂
 - 一八 木魚 一一、五 和歌山
 - 一九 良 一〇、〇 大坂
 - 二〇 文秋 一〇、〇 大坂
- 以下略

次の兼題「下座」五句以内
 しもぎ

三月の予告「誘惑」
 〆切 三月十日
 発表 二月三十日

投句先 大坂市阿倍野区松崎町三
 の一〇 大萬川柳会

大萬川柳会々則

一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その覇を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るを以て目的とします。

二、毎月の出題並びに選句は川柳雑誌社主幹麻生路郎先生にお願ひして居ります。

三、投句はすべて一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附して選句をして頂きますから絶対公平であります。

▽毎月十日締切二十日に発表。

出題及び入選の発表は毎月の川柳雑誌に掲載されます。

四、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め毎月ベストテンを発表します。

▽天の句四点、地の句三点、人の句二点、佳吟一、五、平抜き一点。

五、毎年三月より翌年二月までを一年度として年度間の総合得点の成績により順位を定め年度ベストテン保持者に賞状並びに賞品を贈り大会の選者に推薦し祝賀宴に招待します。同点の場合は前年度優位によって定めます。

六、大会毎年三月に行ないます。

七、会費は不用、但し大会の会費は百円投句料五十円。

八、投句その他の連絡先は大坂市阿倍野区松崎町三ノ一〇大萬川柳会宛に願ひます。

昭和四十年二月

大萬川柳会

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 新春句会 (大阪市)

1月7日 午後6時

会場——千日前 自安寺

昭和四十年の新春川柳句会が七日の夕から暖かい会場で開催され、定刻前に新顔も見え空席のない賑やかさである。新春号を手にして、自分の句をのぞきこみ喜色満面、ファイトを盛りあげる。路郎師は、益々元気で、本夕の柳話は、日舞の形式と川柳の形式の共通点から説き起こし、形式以外に——川柳する心構えを熱意を傾けて説かれた。たまたま新派の名優花柳章太郎氏が亡くなられたので、花柳章太郎氏の若い頃を語る路郎師の懐旧談は、特に興味が深かった。引きつづき三十九年度の不朽洞杯優勝者本多清人氏、並びに、傍島静馬氏外七氏の一年の全出席者の表彰に移り、不朽洞会を代表して、若本多久志氏から、賞状並びに賞品を授与され、満場拍手を以て讃える和やかさ、次いで、席、兼題の披露に入った。

今夕の不朽洞杯受賞は、新進作家坂川有子さん(句楽坊氏の愛嬢)の句に輝いた。

た。時に散会午後九時。

(摩)

出席者——路郎、摩太郎、多久志、野菜、瓢太、太路、千葉、珠笑、呂久三、柳宏子、水京、葉平、市郎、白溪子、奮水、たつみ、恒明、文秋、古方、宛亭、三歩、一舟、清人、花梢、すみれ、真砂、六竜子、八郎、恭太、以兆、静馬、圭井堂、唐佑、一米、清子、弥生、みさ子、素郎、舟遊、すすむ、金三、秀委、薫風、いさむ、滋雀、好郎、いわを、泉陸、柳志、ゞ女、白柳、進之助、小松園、栗、有子、季費、霞乃、宏子、兼題「しつけ」 麻生路郎選

修身反対しつけ反対日 教組 葉平 武士の血が辛棒さというている 三歩 しつけなど知らぬと今の親子なり 呂久三 しつけだけはほめられている 精薄児 光道 問い合わせしつけの事もふれて置き 宗義 内弁慶は年寄りのせいとなし 判志 戦後派の嫁に姑しつけられ 句楽坊 舞妓はん人形の様にしつけられ どんたく しつけ糸こどもは着物とは違い 章雅 初孫のしつけ姑の気にさわり 庸佑 お育ちは人の不作法不思議がり 柳宏子 厳格なしつけPTAでつっこまれ 泉陸 やかましく言うても親の通り真似 清子 顔よりもしつけのよさで嫁さまり 一舟 しつけしつけと神経質の子に育て 好郎 しつけする母親にしつけてやりたく 八郎 知らぬまに親の礼まで言うていた 素郎 綴り方親のしつけの方が先 美房 政治が悪いなどしつけを棚に上げ 以兆 子のしつけ理論通りについて来ず 一米

拗ても酌する様に 鏝られ 小松園 ぼんぼんで育ち不良にすぐ馴染み 柳宏子 先生の方にもしつけほしいデモ 美房 修身を廃し今更何を言う 進之助 先生も親もこの頃甘すぎる 以兆 氏より育ち子どもの所作がものを云い 一米 手を洗う癖が自然についてる児 圭井堂 家のしつけ食堂へ来てさらけ出し 庸佑 着飾った割に鏝のわるいこと 柳宏子 挨拶の長さ三つ指突いたま、 千葉 シツケ糸抜き抜き嫁ぐ日を数え 摩太郎 ご自慢のしつけこどもをいじけさせ 静馬 功成て母のしつけの有難さ 多久志 なにもかも洋式しつけ戸迷いぬ 恒明 いいしつけですと質の娘が孕み 滋雀 保険屋はしつけのよさもほめて去に 水京 しつけする親をばしつけたいよう 太路 先妻の鏝を褒める嫁で無事 小松園 不作法と親の鏝のせいにする 柳宏子 貧にいて折り目折り目の母しつけ 花梢 札を言うことからしつけ始められ 白柳 割りこんで乗って坐れというしつけ 恭太 腕白の子だがしつけは争えず 圭井堂 軽卒なしつけ秀才吐血せる 真砂 子のしつけうまいが俺も敷かれとり 一舟 育児書の通りしつけて母若し 清人 給食へ合掌する児悪びれず 珠笑 しつけしつけと大学生をおいて去に 葉平 余りにもしつけがよすぎてにくたらし ゞ女 スパルタで行くわと生れるまでのマ、 有子 兼題「逢う」 菊沢小松園選

逢うてから話の解る人と知り 白溪子 すれ違い作家なか／＼逢わさない 野菜 親せきにも相談をして逢わせ 柳志 子連れて逢うてはならぬ人に逢い 太路 出世して心置きなく友と逢う 文秋 好きな人逢う度毎に邪魔が入り 喜仙 逢うたびに母に白髪がふえていた 恒明 逢うことが二人の恋を育て上げ いわを 逢いに行く夫と知って磨く靴 珠笑 逢えばすぐ喧嘩するの逢いたがり 一舟 逢えぬ憤り伝言板にはね返る 八郎 黒を着て仏にすまぬ人と逢い たつみ ホルモンの臭いで逢うているだけ目 素郎 横むいて逢うまい過去にある暗さ 宛亭 逢うて又よりを戻したくされ縁 進之助 引き込まれそうに逢うのが怖くなり 白柳 生憎とライバルと逢う美容室 太路 逢いたさで来たか集金せず帰り 一舟 逢うた途端に女帰る時間を言い 栗 子の成績へ妻先生に逢うと言う 季費 すれ違い結局最後に逢うて暮 いさむ 次に逢う日まで待てない受話機とる 美房 入院の妻に逢う日の雨になり 秀委 逢えば愚知逢わねば淋し十三夜 摩太郎 逢うて来たときは女房にさからわす 静馬 逢いに行く草履を母に揃えられ 市郎 逢えばとて何のはなしも無いふたり 葉郎 逢うてからフランを立てる待ち合わせ 庸佑 忙しい中のデートでよくつづき 柳宏子 戎橋逢うては困る人を連れ 千葉 顔みせにかえれと父も気が弱り 花梢 嫁いでもさうと逢いますそれ切り 好郎 面会所金網越しのじれったさ 柳宏子

逢う時間会議は耳を素通りし どんたく
逢うた夜も只嬉しと言えただけ 多久志
逢いたいと電話で都合聞いて来ず 章雅
逢うてやつて居る気がしんどい 同
逢うてやつて下さい坊や歩きます 栗
質屋から真直ぐ逢いに行く若さ 清人
今日かぎり逢わぬつもり紅をつけ 花梢
再会を約す握手のつめたすぎ 女
逢いびきの顔は照らさぬホテルの灯 恭太
逢わせた人へカンフル打って待ち 小松園

兼題「一本槍」 戸田古方選

金貯めることを一本槍としたる梅 光道
一本槍ツルを放れた矢にも似る 宗義
あとは晴れ一本槍の大目玉 野迷路
一本槍でくらしつてゆるよい身 呂久三
下つても買い一本で押し巻く 圭井堂
不意打ちへ一本槍は酔うて避け 白溪子
一本槍自分の殻に閉じこもる 一栄
一本槍ちよつと家風に逆らえり いさむ
意地づくになつて主張を押し通し 柳宏子
限界へ来て一本槍が語を云い 奮水
一とすじに道を求めて世に疎し 静馬
伝統を一本槍の土性骨 白柳
惚れて惚れて一本槍と惚れ抜きて どんたく
一本槍こうと決まれば悔もなし すすむ
大物も一本槍に気がつかれ 一舟
子供一本槍のママに押し切られ 水京
一本槍急所を突いてくる 清子
一本槍裏目裏目にくさらない 恒明
一本槍妻の苦勞を知りながら 八郎
無視されて一本槍でつく若さ 痴亭
一本槍引かぬ闘志で押しまくる 白溪子
世情にはうとく学者の名が高い 千葉

一本槍で行けたは社長若い頃 小松園
こころでは一本槍で押し切れど 庸佑
一本槍こころで方向変える腹 同
富士の山一本槍の大画伯 恭太
一本槍に追うたおんなにひもが居り 静馬
一本槍いっそみんなに疎まれる 太路
際立った理想一本槍が追いつた 太路
一本槍な男月並の恋をする 太路
文化財ロクロを廻す外はなし 太路
孫にだけ一本槍の顔でなし 一栄
一本槍でゆけと小器用叱られる 柳宏子
好きや好きやの一本槍でもた妻 三歩
一本槍なところを買われている 阿呆古

兼題「首相」 吉田圭井堂選

オラが国首相が帰る道が出来 宗義
總理談俺ならこうも云うのにと 野迷路
ボデーガードがチヤホシい首相なり 多久志
どつしりとしてない方が首相なり 一栄
いつの間か首相も雲の上の人 章雅
新首相だん／＼期待薄くなり 柳宏子
新首相のらりくらりの手も覚え 好郎
腹案を抱いて羽田を立つ首相 一栄
野党攻勢見録見せて立つ首相 庸佑
首相の座退いて派閥も宙に浮き 清人
だん／＼に首相こまかいことを云い 柳宏子
グラビヤに首相日本一の顔 進之助
外遊をしてから首相酒がつき 八郎
首相さち／＼ボデーガードが邪魔になり 静馬
政治的笑顔で首相写される 柳志
まだ生きてはりますのか元首相 素郎
静養に名を借り首相息を入れ いきむ
辻易者首相の顔を道具にし 珠笑
元首相手腕もいつか忘れられ 文秋

髭剃ってもらう首相のいい思案 太路
クレカシ又も首相はソツト消え 真砂
辞め方がよいとはじめて首相はめ 美房
名首相飄飄筆の術をつかい 句楽坊
アメリカへ首相政治を聞きに行き 静馬
北浜後場を首相談話がはね返り 六竜子
台所にひびく首相の車中談 進之助
受けついで替りばえぬ新首相 金三
寛容と調和の首相でたよりない 静馬
夢に見た首相の椅子も棄てなし 水京
なるまでの首相気があるな公約し かつみ
ジョンソンへ首相は夢を伝える気 太路
ニコソンの酒へ首相も批判され 白溪子
国訛おらが首相を振り廻し 千葉
お点前に妻とくつろぐ日の首相 清人
新首相もう要点のない談話 珠笑
新首相の抱負へカメラ追いまわし 進之助
前首相其後の沙汰は絶えてなし 小松園
施政演説首相背なかにかかゆるなり 古方
泥合戦今は云うまい首相の座 庸佑
正直にものが言えたらなと思ひ 多久志
資本家の操つる先にある首相 かつみ
首相の座しんどかろうにしがみつ すすむ
官房長官が添削をして首相談 葉平
就任の日から打倒を言われる身 美房
何かやるだろうと首相当てにされ いわを
宰相が小粒にみえてくる時 世素郎
首相の卵未だ村会でもた／＼し 八郎
首相ともなれば嘘まで拵違ひ 圭井堂

鳥籠を揺り動かして餌をせき 白溪子
カナリヤが外貨をかき声を出し 庸佑
御題などおかしなにかしわにし 好郎
鍵つ子に世話を委かせる鳥を飼ひ 白溪子
鳥を御覧鳥はデモせずストもせず 摩太郎
鳥飼うて旅にも出れぬ不倖せ 柳志
遭難の場所を鴉に教えられ かつみ
豊楽へ鳥もこの世は住み憎し 太路
死刑囚と知らず小鳥のなきつづけ 一舟
籠の鳥籠を逃れてから食へず 八郎
日曜の鳥籠だれにもふれさせず 清人
小鳥までガスやダンブがうばいとり 一舟
渡り鳥空地を見つけてから肥り 奮水
鳥の群共産園などと云うとらず 摩太郎
出棺の朝も雀が来て騒ぎ 珠笑
デパートの隅で小鳥のイイローゼ 瓢太
転居したしばらく鳥に起こされる 珠笑
我が翼信んじた鳥は射落され 小松園
行き届く世話より自由が欲しい小鳥 清子
スモッグに酔うのは小鳥だけでなし 白柳

席題「こっほり」 若本多久志選

こっほりの鈴も初春らしい音 庸佑
こっほりの分だけ背丈が高くなり 瓢太
ウインドへ来てこっほりの音が止み 白溪子
石段をこっほりゆつり歩かされ いさむ
お下りのこっほり鼻緒の色がさめ 三歩
こっほりに駄々をこねる千歳鈴 圭井堂
こっほりの鈴へだらりの帯が揺れ 以兆
こっほりでちよ／＼年玉取りに来る 清人
こっほりの鈴がなる／＼法善寺 女
こっほりへあわてて包むお年玉 一舟
こっほりを脱がす母の腕に拘ね 白柳
哀歌をおこほ小さい胸に秘め 太路

席題「鳥」 清水白柳選

回復期放してやった青い空 八郎
解禁を親鳥ひなに言い聞かせ 多久志
青空を感じたか鳥鳴きつづけ 古方

六文の足袋へこつぱりきつ過ぎる 八郎
 タコ焼喰べくこつぱりの娘が歩き いきむ
 羽根突きへこつぱり脱ぎに戻つて来 柳志
 こつぱりに遠き明治の音を聞き 呂久三
 コツボリが嬉しいべへが嬉しい娘 金三
 雪の日は土間でこつぱり履いただけ 白柳
 姉ちゃんのお古へこつぱりだけが新ら 以兆
 白足袋にこつぱりぬげをな七五三 静馬
 こつぱりのほこりも払うた大晦日 三歩
 こつぱりを履いてもマと呼び馴れる 以兆
 こつぱりが親の苦勞を知つて居り 呂久三
 こつぱりで抱っこ抱つこの七五三 花梢
 こつぱりをバトミントンに脱がされる 圭井堂
 思ひ出はこつぱりぬいだ反橋 摩天郎
 寝正月の父をこつぱり承知せず 六竜子
 参道で鳴るこつぱりをなかにいれ 舟遊
 こつぱりで春の輔道を乗しがり 文秋
 こつぱりの足危かし七五三 文秋
 コツボリを隣近所へ聞かせて来 柳宏子
 こつぱりを抱いて寝ました幼き日 清子
 こつぱりも十一文の舞妓なり 野菜
 いけすかんお客へこつぱり高く鳴り 多久志

席題「手まねき」 本多柳志選

手まねきの通じたらしい声となり 古方
 隣室へ医者の手まねきもうあかん 痴亭
 ネオンの海苔んな手まねきしてゐるや みさ子
 手まねきの順序で今日の職につき 清子
 朝帰り児の手まねきに立ちすくみ 一舟
 手まねきとウイंक夜の灯に迷い 弥生
 タイミングよく手まねきへ秘書が立ち 白溪子
 近づいて見れば手まねき啞であり 三歩
 交差点手まねきされた運のつき 清人
 手まねきでやつとわかつた久し振り たつみ

お年玉手まねきすればとんでくる 瓢太
 歳甲斐もなく手まねきにすい込まれ 圭井堂
 手まねきにうかうのつて又ボラれ 痴亭
 お目玉をくらう手招きとは知らず 八郎
 手まねきにうかつり飲んでボラれて来 静馬
 手まねきに帽子取られぬように寄り 野菜
 手まねきが叱言と知つて寄りつかず 泉陸
 手まねきをすれば思わぬ仲居が来 摩天郎
 手まねきを立つてするのに気が付かず 金三
 白髪見ておんな手招きやめにする 静馬
 手まねきで行けば燗番言いつかり 多久志
 手招きを見て見ぬふりもせにやならず 素郎
 手まねきで裏へつれ出すお取込み 金三
 手まねきへのこのコアントアとおまへんわ 恒明
 手まねきにうかつり乗つて丸はだか 圭井堂
 白扇でする手まねきは耳を貸し 以兆
 手まねきで招んでチップを握らせる 葉平
 手まねきが土産を呉れる顔になり 白溪子
 手まねきで飲んで百円貸してんか 三歩
 手まねきは僕でなかつた妻揚子 素郎
 手まねきの女へ屠蘇が崩れかけ 六竜子
 春夏秋冬ポスター招いているホーム 進之助
 うかつりとも有る紅に付いて行き 八郎
 手まねきの通りに背の子もまねき いわを
 手まねきのつられてならぬ路地を抜け 瓢太
 手まねきも尻目に今日も清く生き 一舟
 ポーナスの重さを女手でまねき 六竜子
 手まねきへ赤信号が長すぎる 恒明
 福帳を売る手まねきをうれしが 柳志

川維 阿倍野支部句会（大阪市）

飲んで寝て起きて又飲む三カ日 柳宏子
 一張羅へそくり分を引いて言い 文秋
 ぎりぎりまでパスしたなどおとしやら 梅里
 除夜の鐘ラストは春の音で鳴り 柳志
 てこ入れを里がしてから敷かれ出し 阿茶
 ギリギリの生活になれて苦にならず 清子
 てこ入れしただけ余分に倒される 静馬
 喧嘩好き飲めば相手が弱く見え 又來
 一張羅着て叱られる 常務宅 小松園
 ギリギリに出るポーナスはたかが知れ 金三
 一張羅思い出深い酒のしみ 多久志
 一張羅着たのに祝辞ひとがやり 好郎
 ラジオなら切つてやりたいへらず口 市郎
 お茶を飲む時間を入れて八時間 八郎
 一張羅ぬれても行けぬ傘を買い 一栄
 元日が明日と云うのに生まれて来 あいき
 カラまで飲めとは無茶な胃の検査 圭井堂
 ママゴと親をつくりの飲みつぶり 幸雄
 てこ入れが半端で負債増えただけ 一舟
 一張羅年玉貰いに着せてやり 玩柳
 飲まねばいい父さんだがと手内職 瓢太
 ぎりぎりの世帯へ国から居候 野菜
 へらず口憎まれながら長生きし 痴亭
 年末も春もこれぎり一張羅 白柳
 へらず口まだフレンドの域を出ず 章雅
 ベイリに來て見送りの義理すませ 静波
 北北になつても望みまだすてず 宗義
 てこ入れのてこが弱つて共倒れ 野迷路
 吸いざしを手荒く捨ててへらず口 黙平
 事故現場でこへ祈つた目が眩み 滋雀

川維 玉造支部句会（大阪市）

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代

名古屋昭和区村田町2 (88) 9069

川維 ハワイ支部句会（ハワイ）

寒山快夢起報

威勢よく早口で売る魚市場 市郎
 早口になると出てくる国訛り 白柳
 宿直の枕が固い新入社 柳志
 米枕は仕舞い忘れた頃に要り 順三
 行詰まり地図を出したり尋ねたり 寿美司
 親会仕つぶれた余波で行き詰まり 静馬
 小包へあふれる母の愛を詰め 六竜子
 金詰り金の値打ちを子に教え 正彦
 見えすいた嘘が出る程つまつて来 文秋
 押詰まり植木の土もひからびる 一栄
 あの時を笑つてます茶の間の灯 呂人
 作家まだハッピーニードを匂わす 珠笑
 貫録の髭へ鼻水意地悪く 章雅
 鼻水の行方を孫が見詰めてた あいき
 老らくの恋は鼻水すすり あい 風仙洞
 鼻水をすすり夜なべのうんと喰い 滋雀
 借本へ済まぬ不覚の水っ鼻 金三
 鼻水で困つていても娘は薄着 一舟
 鼻水をすする間もない程叱り 珠笑

混合の中で 神経高ぶらせ あき坊
一喫の茶で神経を落ちつかせ 万里歩
神経を酒酒酒へ集中し 曉舟
熱の子へとがる神経 咳一つ 泉水
神経を静めるための酒を飲み 浅太
お天気を神経痛が知って居た 同
神経の図太き蝦蟇に似た親子 峯円
鈍感な神経無事な俺を見る 同
馬鹿だとは言わず神経鈍って居 紅茶
季の刺激なくて神経ほけちまい 紅溪
神経の太さはソ連上手なり 快夢起
神経の図太き借金苦にならず カロ女
神経痛気象台よりよく当たり 柳葉
待ち呆け綜合神経すりへらし 柳葉
神経を使い果たして生さんとす 魔花麗
お、君か相手に不足ない酒豪 同
向つ腹相手がなくて猫を蹴り カロ女
誰彼の相手選ばず話しかけ 紅溪
娘は相手自分で選ぶと言て去り 泉水
変屈で世間相手にしてくれず 紅茶
可愛さに孫の相手も小半時 浅太
なんとく気なる相手酔えもせず 曉舟
そつと解く拳相手は係長 柳葉
留守番と孫の相手に今日も暮れ 快夢起
飲める口相手の席へ座り込み 万里歩
アナウンサ見えぬ相手に気をつけ 押山
晩酌の相手が妻で今日も暮れ あき坊
軽く見た相手に軽くしてやられ 峯円

田中烏雀報
はんとおの抵抗お母さん寝てる 磯
抵抗を楽しんでいて風船をわた 烏雀
南京の露路の水雨が過去にある 豊次

川維 京都支部句会 (京都市)

離村して引く荷を追う 氷雨 句楽坊
十ヲムツ麻薬氷雨の中を来る 真砂
神様も含めて聖しこの夜です 司郎
水を含んでゐるから美しい石である 白史
裸木にもたれてるお地藏さんに春 ゆきら
窓越しの裸木と点滴の無限の距離 枯粒

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

新薬のサンプル宣伝程効かず 光郎
決めかねてまた見本棚に戻り 雅城
気前よくチップを出して後悔し 魯木
後悔をするなとすこむ街のダニ 味平
後悔は段梯子の蔭に居る 醉羊

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄選

紳士面無理に気取ってわけ易し 基弘
田舎紳士都会紳士はすぐわかり 日呂志
脱白も紳士になって里飯り 寒月
灯を消して紳士の仮面ぬぎする 宗義
紳士振り子が折目がなさすぎる 天竜
女権には冷たいまなこもつ紳士 謙士
紳士今日税務署行きの服を着る 一声
服ぬげは紳士の背にもサロバン 丘郎
発車ベル紳士立をばあて食い 柳五郎
紳士気取りはよせと気軽な云々 仲
旅の宿紳士を捨て、見たい夜 鮫虎狼
一等車の紳士淑女は冷たすぎ 哲郎
すきのない紳士へ淑女近よれず 三平
救いの手紳士をさっば向いて去り 鳳月
モーニング脱いで紳士の顔も脱ぎ 佐加恵
ハンカチをはきみ紳士ができ上り 久米雄

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

農繁期辛のおやつに胸が焼け あきら
友人が胸ののちやもや話に来 水仙
胸算用してとどける手を使い 良江
胸ぐらをつかんだ方が先にのび 美枝子
鳩胸へ洋裁少し骨が折れ 胡風
バラの花胸に飾って公約し 卓久
ボンと胸叩いて来たがあてがなし 斧九郎
胸張って歩けと行進曲になり 浄美
言いたいのが半分胸にしまつとき 謙士
子の笑顔胸にバッチをして戻り 静子
やけそと知らず度胸をはめちぎり 宗義
なげかける男の胸にあるぬくみ 正洲
祝電の一つが胸をえぐる過去 鈴ん坊
胸三寸おさめかねてるしうい顔 千秋
老刑事胸の鼓動を見逃さず 一声
呑んでから胸のしりが解けかり 伊久野
胸くその悪い日靴の土埃 三六
好条件結婚の日取りも早めさせ 幸仙
二四万回国会議員は無条件 正雄
仲裁に条件つけて一任し 計
条件ががんにがらににしてしま 久米雄

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

候補者の人出ねらった 第一声 芳子
もみくちや人出へ帯が気にかかり 加代
人出待つ花は自然の色に咲き 祥月
菊に待つ人出の中の白い杖 好江
なんとなく人出の中を流される 富雄
見渡した人出へスリの胸算用 晃男
デパートへ嫁と姑の冬仕度 侑正

川維 宇都支部句会 (宇都市)

津秋六花報

白鳥が来て冬仕度せきたてる 正夫
冬仕度雪のニュースがせきたる あきお
さむ風に心せかれて冬仕度 孝華
忘れると決めて女は鏡拭く 綾美
忘年会しかり飲んで酔うと決め 秋生
酔うてから末座の方が騒ぎだし 敏明
人出待つ祭ばやしへ空も晴れ 栄治
さっぱりな人出に早く店を閉め 政吉
女客中の一人は飲める口 きみえ
酔う程に心の窓を明け放し 清風子
酔うとすぐたつた一つの悪いくせ 清夢
就職が決まって今日は酔うつもり 鶏生
雨となり人出一手に百貨店 勇
酔うても酒の残りは知って居り 明朗

主人より成人のことに肩を入れてる子
成人式和服が日本の街にする 実男
成人を迎えて長男大人ぶる 利子
長男の成人家族皆揃い 同
成人の日まで辛抱した煙草 同
これからは議員も頭下げてくれ 羊蔵
成人を仏間に告げる母子家庭 弘道
成人の自覚を母に打ち明ける 難足
成人の子へ目頭をぬぐう 寡婦 かつ子
成人となつて責任持たされる 頼子
終戦の記念成人の子に残り てる子
縁談が成人式を持っており 実男
成人を迎えて世の中広く住み 百歩
成人式済んで自分の責を負う 羊蔵
成人となった自覚で社説を見 実男
成人を議員と酒屋に祝われる 弘道
成人会大人と子供を振り分ける かつ子

阿部柳太報

はれてゐる弱身男は見栄をはり
人妻とデイトへ因縁つけにくる
泣きおとし母の弱味を知りつくし
歎章の次は剣でも吊す気か
酔えば出るコンベントーをお祖父さま
金鶏今日アチヤリと云う落ち目
四年後はきつと勝てると力づけ
火事見舞女の力の恐さ知る
い親類だけを仲人力説し
辛くとも生きる力は子が支え
堪えぬいた母の力は子を博士
はつきりと無力を知った酒の味
親類中集めた力たかが知れ
入選へにじむ努力に母がいる
聖火燃ゆあゝ日本の底力
音頭取る自慢に生きた八十年
三次会泣くよりましな唄が出る
あれがまあ歌の氣でゐるババの風呂
芸者の抵抗女の客にうたわせず
ハドツゴで無いぞ小唄だ三味を弾け
旧家とは玄關先ですぐわかり
格子戸にのれん旧家の家伝葉
外出はトッヅモードで旧家の娘
仲人へ家系図説いている旧家
村道が旧家のとこでひん曲がり
古川に水たえずさがは旧家なり
焼けた梁に貫録のある旧家

すみれ
静林庵
清子
尚史
八郎
六童子
克忠
孤舟
敏子
日出男
水美
きはち
美代
花梢
摩太郎
紅月
句鬼
美房
重子
貴山
ふみ子
ひろむ
栄一郎
呂人
柳太
吉太郎
白柳

村田瓢太報

村田瓢太報

頭から叱り飛ばしても母は母
頭下げる生活に悔いず強く生き
お料理は娘の作を強調し
古女房料理の数も決まって来
取り戻す客へ料理の力こめ
団体さんの料理は早よから出来ており

泉 陸
扇 里
素 女
茂 児
裕 児
飄 太

この勤めまんざらでなし年暮れる
まんざらでない話割勘と言ひ出せず
まんざらでないのに見合ひしがつとき
その実はまんざらでない呑みつぐり
どの顔も一つはええとこあるもんや
この顔へ気の毒な程パフたたき
クシャクシャの顔が金となる芸となり
お隣りの歳暮ばかりを預けられ

扇里 邦彦 巴子 瓢太 圭子 美幸 裕兒 泉睦

川岡靈眼子報

ご繁昌ノシノコ節へ鶴が舞い
御繁昌父の位碑も安緒する
聖き夜飲屋ばかりが御繁昌
御繁昌振りをひけらかす自家用車
七転び八起きもなつて繁昌し
ひやかしの客と税務署見てくれず
すき焼の匂う寒さも十二月
児のものをどくら揃えた十二月
閑人も忙しいと云う十二月
寝ていても心せわしい十二月
十二月借金とりの御あいそう
おわれ月十三月もあればよい
十二月言葉が招くセリの市

重幸
重信
卓二
嘉象
万象
素舟
重幸
可然
良降
筆染
破竹
サワノ
雪眼子

山本素郎輯

山本素郎報
おはあちゃんの童謡脱線したまんま 一枝
童謡も宴会調になる 年 期 弓 彦
童謡が好きで近所の子がなつき 福 郎

童謡で機嫌とるのも宮仕え
夜遊びもようせん奴と意見され
夜遊びのおかげで角がとれました
夜遊びがマツチでしれる社用族
夜遊びが過ぎてアングロリンクス
ホステスを全部送つてきて茶漬
夜遊びにいつそ嫁でも持たそうか
夜遊びもするが骨身も惜しまない
ゆきを

梅里
景達
恵美子
酔泉
尤三
桑郎
百酒

川口理休報

無難作にガタガタ釘打つ社宅族
 社宅では人事も妻が先に知り
 地位のよさを社宅しむじみ味あわせ
 BGのケンカ課長はトイレ行き
 間の抜けた仲裁が出て又こじれ
 其の都度に仲裁の要る酒のませ
 本心を云うよと暖簾又くぐり
 本心などどこにあるやら老社員
 本心は聞くまでもない二十才なり
 ちやつかと現金もつて嫁ぎゆき
 今日はい皆出席してます給料日
 ちやかりと三ツ子もおやつの場所おぼえ
 往年の首席はネクタイ曲つてい
 きさいいずきも程々に等と煙がられ

理休
 狂史
 広彦
 狂史
 同
 理休
 ルミ
 広彦
 ルミ
 広彦
 登之
 はたる
 狂史

田中風柳報

田中風柳報
おしやべりもタイムスイッチで安心 濁水

おしやべをりけしヨシヨシとうまく逃げ
外孫のしやべる通訳ママがする
おしやべりの間に晩のオカズ決め
おしやべりに来たのと保険を勧誘し
横になつてからもおしやべり未だ続き
万才師あまり車中でしやべらない
おしやべりが過ぎてゐるめづきになり
久しぶり逢えばおしやべり寝床まで
良くしやべるくせに借金ごとわれず
おしやべりが静かになれば寝びきかき
客の前おしやべり過ぎてつめられる
赤ちやんのしやべりをママ通訳
世界一のブルー作つて銅一ツ
孫欲しさ谷間の地蔵に願をかけ
オリンピツク国旗上らず物価上げ
寝そびれば一人でなかつた湯の宿
老会で浮世の末を返り咲き
献血を売つて日赤ポロ儲け
マラソンを全コース見て応援し
金メダルかけたしゆかんの涙見る
酔覚めに胃の腑の健康有難し
ジェットが落書みたいに飛行雲
なつかしく思う古里地名だけ

同 清江 弘村 同 富士 風柳 繁子 源川 同 芳子 美代 源川 久子 風柳 弘村 喜久 濁水 繁子 芳子 弘村 同 富士

大萬

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL (三三) 三九三五番
(三三) 七七八二番

鮎の店

アベノ橋近映地下食通街
TEL (三三) 〇一四七番

串の店

南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (三三) 九一八四番

柳樽室

路 郎 生



★新しい年を迎えた
と思つたら、もう二月
である。新聞なら自分
が休養をとつても、社
の誰かが働いてく
れるので、新聞だけは
間違ひなく出るが、月
刊誌ではそうはいかな
い。自分が一日休養を
とれば、一日分の仕事
が残りの日へ加重さ
れるので、一日として
休むわけにいかない。
一日ぐらい湯につか
って、洗脳したいと思
つても、あとへ加重さ
れてゆく仕事では保
養にならない。そこで、編
集室の机の上に早春の日
射しが躍るのをウツ
トリと眺めているくら
いのものだ。それほど
働いても、自分ひと
りでやる仕事でないだ
けに、どっか一カ所で

の支障がたつたて、発
行日がズレタリする。
チト手伝いましようか
と善意の申し出がある
が、そう簡単に手伝え
ることではないことが、
やって見たら判るの
で、すぐ手を引く。曾
て新聞社や雑誌社など
の編集に携つていた人
なら手伝えるが、そう
でない人では手伝いが
手伝いにならないこと
をすぐ気づかれると思
う。自信のある方は
遊びがてら柳樽室を
のぞいて欲しい。
★元旦に市長公館での
年賀に顔を出した。中
馬市長は張り切つて
いられた。大阪の緑
化もズンズン実現し
て欲しいものだ。
★伝統の牙城を護つて
四十五周年の「きや

り」のお祝いと、主幹の
村田周魚氏の喜寿のお
祝いを兼ねて四月四日
午後一時から東京文化
会館で記念句会が開催
されることになった。
老生も末席をけがして
祝辞を述べることにな
っている。柳縁
につながる人たちは
万障を排してお顔を
拝借したい。
★元、本社の賛助だっ
た風蔭・高尾亮雄氏が
亡くなった。一月三十
日に上木町四丁目の大
念寺で追悼法要が修営
されることになった。
した時には司会をやつ
て呉れたという柳縁淺
からぬ仲だ。若い時は
蒲柳の質だったが年と
共に顔色もよくなり八
十八歳の天寿を究うし
た。童話界の草分けだ
ったし、あらゆる文化
方面の世話人として
広く知られている。
★今朝、テレビの美容
体操というのを見た。
近代的な美人が画面に
跳り出て、軽快そのも
のの体操を見せてくれ
たが、この体操はティ
ーンエージャーのもの
で、老化作用をいそ
ぎつつある老生など
が、やつたら頓死体
操となるだろうと苦
笑したのであった。
★私は何事をするにも
四日に朝日会館で開催

寒中お見舞

健康第一主義を実行して

下さい。

私もやります。

麻 生 路 郎

出鱈目はいやだ。憎力
でやるのはいやだ。ど
んなささいなことでも
全力主義だ。徒らなP
Rはいやだ。ウラでゴ
ソコンやるのはいや
だ。いいたいことはい
いたい性だ。ウソのな
い人生をマッシュグラ
にやって行きたい。こん
な性格なので、誤解さ
れたりすることが多
いから年中損ばかりし
ているが、どうせ余命
は知れたものだろう
からこれで押し通さ
せてもらいたい。
★みんなしつかり句を
作ってくれ、いのちあ
る句をネ。
★川雑支部二月句会
★宇部句会・7日(日)
一時、題、逃げる・追
う・駄目・いやよ、
所、恩田長沢津秋六花
居、★かがみ句会・2
日(火)一時、題、せ
っかち・耳打ち・才能
・評判・二枚目、所、
池田古心居、★明和研
究句会・14日(日)一
時、昔・機械・福、
所、阪神鳴尾駅下車東

南二百米鳴尾公民館、
★京都句会・16日(火)
夕、題、栄枯・劇薬・
慕う・所、上京区相国
寺北門前上ノ町妙庵、
★玉造句会・10日(水)
六時、題、苦しみ・貴
う・糸、所、市電玉造
南百米大阪信用金庫、
★阿倍野句会・20日
(土)六時、題、金つ
る・曲り角・定規・控
郎居、

発行所 川 柳 雑 誌 社

一人一冊素晴らしい句を



★路郎好
みだに句
がきいて
ます。句
会にお使
いになり
ていただ
くには、
何冊かの
集の礎が
あなただ
の贈答に
又柳友へ
の賞品に
最適です
是非利用
下さい
一冊八〇円
(送料廿四)

あなたの句帖として
ご利用あれ



活力を高める

強精と長生への天然の強壮効果



日本新薬株式会社

ドイツ・マックス社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤

アピ

正式名 アピフォルテール

会長・麻生 霞乃女史

婦人友の会会員を募る

川柳雑誌社内川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区ニッ井戸町23

山 川 阿 茶

川柳 詩川柳考

高鷲亜鈍著

B9型函入

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した—今は柳会にあって庶民の詩人的自覚を促す—ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る—凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書。

東野大八著

風流 人間横丁

B6型二五八頁

★異常な戦争にまきこまれ隻手となつて帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳 句集



価 250円
送費60円

▲著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入つて採まれ、川柳編集部として精進を続けている前途ある好作家である。

★この送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

発行所 大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

川柳雑誌社

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 綱 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

羽田 莞 (十句以内) 黒川 紫香選
オールドミス (十句以内) 田中 烏雀選
黒田 節 (十句以内) 傍島 静馬選
窓越し (十句以内) 正本 水客選
足場 (十句以内) 金井 文秋選
著 (十句以内) 金井 文秋選

近作柳樹 (雑誌十句以内) 毎号募集

方田 帖 (雑誌十句以内) 麻生 路郎選
川柳 塔 (雑誌十句以内) 北村 好郎選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生 路郎選

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記すること。
▼ 「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」「方田帖」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第四十号

定価 一〇〇円 (送料六円)

(禁転載) 半力年 七五六円 一力年 一四四〇円

昭和四十年一月廿五日印刷
昭和四十年二月一日発行

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
電話 大阪 綱 六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和四〇年二月一日発行（毎月一日・同発行）

編集 兼 発行 印刷人

麻生堂一館 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪(671)六〇八一

郵政口座大阪七三〇五〇番 定価百二十円（送料六円）

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

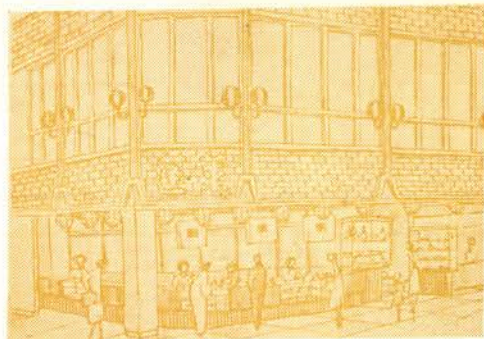
高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S



塩野義製薬株式会社

豚饅・焼売



広東料理

蓬菜

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアード

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもの
もろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかんして発生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味わい方は——以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

取次所

川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘法町27 振替東京29507

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価 二五〇円
送 七〇円

— 川柳の作り方と味わい方 —

麻生路郎著

好評噴々

新川柳観賞

川柳の味わい方・五百数十句

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方
がなかなかうがって、一気に
読ませる魅力がある。

価 二五〇円
送 八〇円
B 6 版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
郵政口座大阪七三〇五〇